

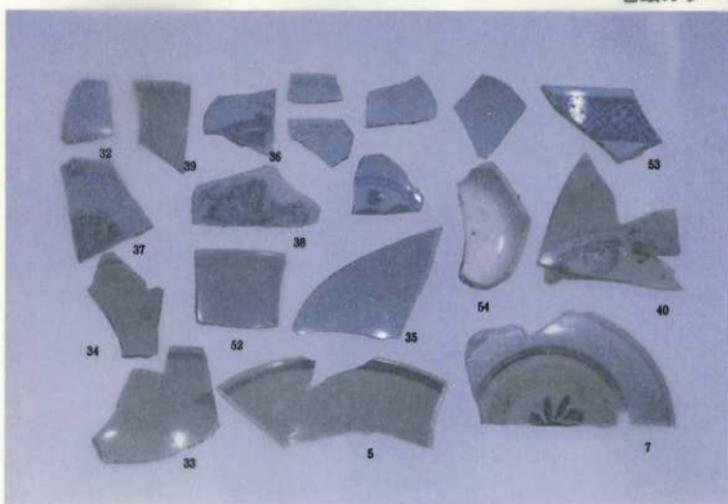
高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第2集

大宮・宮崎遺跡Ⅱ

1998・3

高知県幡多郡西土佐村教育委員会

巻頭カラー 1



染付（内面）

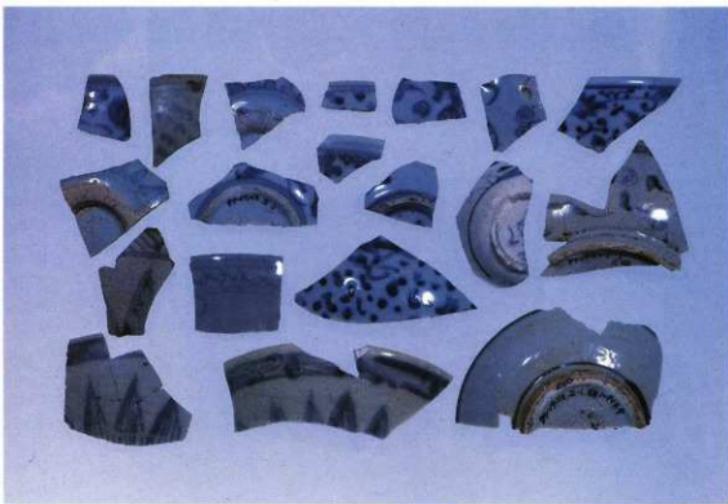


(外面)

卷頭カラー 1



染付（内面）



（外面）

巻頭カラー 2



肥前系皿・碗、天目茶碗(内面)



(外面)

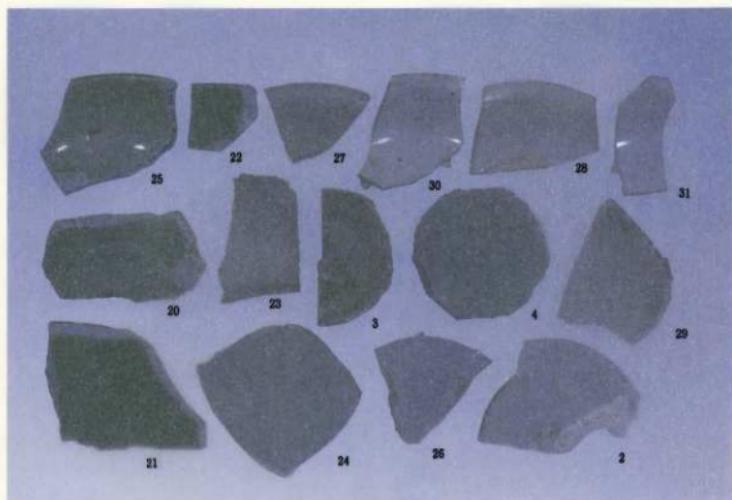


肥前系皿・碗、天目茶碗（内面）



（外面）

卷頭カラー 3



青磁・白磁(内面)

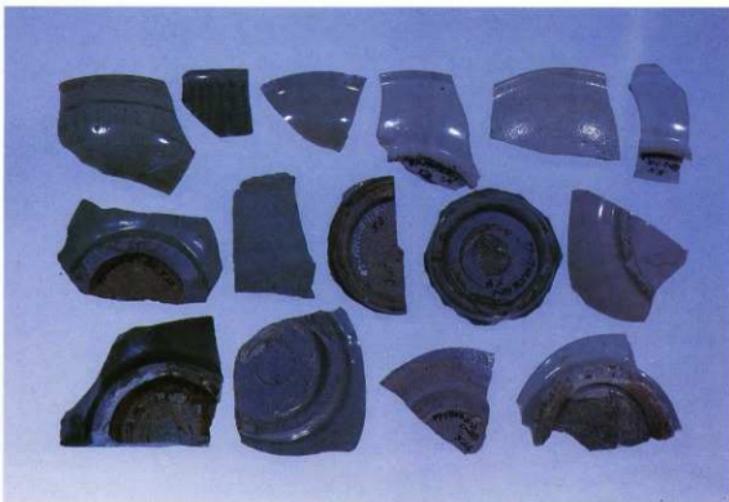


(外面)

卷頭カラー 3



青磁・白磁（内面）



（外面）

大宮・宮崎遺跡Ⅱ

1998・3

高知県幡多郡西土佐村教育委員会

序

西土佐村は、日本最後の清流四万十川が中央部を流れており、水と緑にかこまれた自然豊かな山村で、31の集落が点在しています。本流及び支流沿いに発達した耕地は、基盤整備が遅れており、補助事業を導入しながら整備を進めてきたところです。

平成元年度から県営は場整備事業を導入し、整備を進めてまいりましたが、平成8年3月下旬、工事現場より大量の縄文土器が露出し、遺跡が確認され、村単独事業による第1次緊急発掘調査を実施したところです。

平成9年度は、補助事業により第2次の発掘調査を行ったもので、今回報告書を作成することが出来たものです。

今回の調査では、期待された縄文時代の遺構は検出されなかったものの、中世から近世初めにかけての貿易陶磁器や国産陶磁類が数多く出土し、大型建物の存在も確認することができました。昨年度の縄文祭祀の成果と共に、当地域が複数の時代にわたって重要な位置を占めていたことの証しです。これらの出土遺物は、中・近世の流通や生活様式を復原する上で貴重な資料となることと思います。今次調査報告書が地域の歴史を解明する上で、且つ斯学の向上のために資することを願って止みません。

最後になりましたが、今回の調査に当っていただきました高知県埋蔵文化財センターの専門調査員、村の調査員、調査にご協力いただきました地権者、発掘作業に携わっていただきました作業員の皆様方に心から感謝とお礼を申し上げる次第であります。

平成10年3月

西土佐村教育長

横山茂男

例　　言

1. 本書は、高知県西土佐村教育委員会が「国庫補助」を受けて平成9年度に実施した大宮・宮崎遺跡の学術調査報告書である。
2. 大宮・宮崎遺跡は、高知県幡多郡西土佐村大宮にある。
3. 調査期間は、平成9年10月20日から同11月日である。
4. 調査面積は、900m²である。
5. 調査体制
 - (1) 調査員　山原恵三(高知県文化財団埋蔵文化財センター　調査課第3班長)
今城宗久(西土佐村文化財保護審議委員)
 - (2) 総務　芝正司(西土佐村教育委員会　社会教育係長)
 - (3) 調査顧問　木村剛朗
6. 本書の編集は山原が行い執筆については下記のように分担した。

第Ⅰ章	芝正司
第Ⅱ章	今城宗久
第Ⅲ章	出原恵三
第Ⅳ章	1-(1)+(2)+(3)-(1)、2. 出原恵三 1-(3)-(2) 前田光雄(高知県文化財団埋蔵文化財センター　主任調査員)
第Ⅴ章	出原恵三・前田光雄
7. 本調査を実施するにあたっては、地権者竹葉景光氏、岡村勝行氏の格別の配慮を得ることができた。また現場作業員・整理作業員として下記の方々の協力を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

現場作業員	岡田一記　岡村ウタ子　中川葉子　正木スガ子　浦宗一代　岡村美鶴　佐田喜代子 竹葉八重子　浦宗里美　田中光猪
整理作業員	浜田雅代
8. 調査及び報告書の作成においては、下記の方々からのご親切な指導、教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

犬飼徹夫(日本考古学協会会員)	大橋康二(佐賀県教育庁)
藤澤良祐(財瀬戸市埋蔵文化財センター)	浜田恵子(高知県埋蔵文化財センター)

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 周辺の歴史地理的環境	2
第Ⅲ章 調査の方法	4
第Ⅳ章 調査の成果	5
1 Ⅲ区	5
〔1〕基本層準	
〔2〕検出遺構と遺物	
〔3〕包含層出土の遺物	
① 上 器	
② 石 器	
2 Ⅳ区	20
第V章 考 察	24

挿図目次

Fig.1: 西土佐村位置図	1
Fig.2: 遺跡分布図 (1 : 50,000)	3
Fig.3: 調査区位置図 (S = 1/2,000)	4
Fig.4: 調査区位置図 (S = 1/1,000)	5
Fig.5: セクションベルト・小縄集中山土地点位置図	6
Fig.6: 基本層準	7
Fig.7: 検出遺構全体図 (S = 1/200)	9
Fig.8: S B1 平面及びエレベーション	10
Fig.9: S K1~4 平面・セクション・エレベーション	12
Fig.10: S K5・6平面・エレベーション	13
Fig.11: 遺構出土遺物実測図	13
Fig.12: 包含層及び整地層出土遺物実測図	15
Fig.13: 包含層及び整地層出土遺物実測図	16
Fig.14: 包含層及び整地層出土遺物実測図	17
Fig.15: 石器実測図 (1)	19
Fig.16: 石器実測図 (2)	21
Fig.17: 石器実測図 (3)	22
Fig.18: 石器実測図 (4)	23
Fig.19: 南四国石材別遺跡分布図	31

写真図版目次

図版目次巻頭カラー1：染付け

2：天目茶碗・碗・皿

3：青磁・白磁

PL1：II区遠景(北東から)、III区遠景(東から)

PL2：SB1完掘(北西から)、同上(南東から)

PL3：SK3検出状況、SK3完掘状況

PL4：整地層(東)から、II区セクション

PL5：II区セクション、II区完掘全景(南から)

PL6：II区完掘全景(北から)、作業風景

PL7：II区遺構・遺物

PL8：備前焼

PL9：肥前窯皿

PL10：繩文土器・肥前窯陶器

PL11：石鎌・削器・磨製石斧

PL12：石鍬・石核・磨石

PL13：剥片

表 目 次

表1 遺跡名一覧表	3
表2 石器一覧表	17
表3 15～16世紀の土器・陶磁器組成表	25
表4 高知県西南部の遺跡出土貿易陶磁器組成	25
表5 出土遺物から見た高知県の15～17世紀の遺跡消長	27
表6 遺跡類型表	32
表7 繩文土器観察表	33
表8 中・近世土器観察表	34
表9 石器観察表	37

第一章 調査に至る経過

大宮・宮崎遺跡の調査は、平成7年度に着手された「西土佐村地区県営は場整備事業宮崎工区工事」に伴う緊急発掘調査として平成8年度から行っているものである。平成8年3月下旬、は場整備工事により大量の縄文土器片が出土し、遺跡が確認されたものである。重要な遺跡ということもあり、事業主体とも協議し、は場整備事業の地区外として発掘調査を進めている。

大宮・宮崎遺跡のある大宮地域は、西土佐村でも有数の田園地帯となっており、平成元年度から県営は場整備事業を進めているところである。現在、ほぼ工事は完了し整備された水田では、米なすやアロエなどのハウス栽培も始まっている。また、ライスセンターを保有する農事組合法人が田植え、刈り取り、乾燥脱穀などの水田作業の受託事業が行われている。

大宮地域は、古く縄文時代に狩猟民が生活していたと思われ、大宮・宮崎遺跡の背後に位置する大宮神社境内と大宮小学校の校庭からは、それぞれ、環状石斧と7個の石鏃が出土しており、同校に保存されている。

平成8年度の村単独事業による緊急発掘調査では、縄文時代後期（約3000年前）と見られる、「縄文のピーナス」と名付けられた線刻疊が出土している。また、祭祀跡と見られる配石造構も多数検出されている。また、古く縄文早期のものといわれる押型文土器も確認され、この地域に古代人の足跡が刻まれていることがわかっている。

今回の発掘調査は、第2次調査と位置づけ、西土佐村教育委員会が主体となり御高知県文化財団埋蔵文化財センターから専門調査員の派遣を受け、平成9年10月から埋蔵文化財の記録保存を行うことを目的として実施した。



Fig. 1 西土佐村位置図

第Ⅱ章 周辺の歴史地理的環境

大宮・宮崎遺跡のある西土佐村は、高知県西部を占める幡多郡の北部にあり隣接する十和村などと共に北縦と呼ばれる地域に属している。西部で愛媛県宇和島市と北部で同松野町と接している。高知県中東部の県境が険しい四国山地によっているのとは異なり、この地域は往来の容易な比較的平坦な街道筋に県境が引かれている。したがって古来、伊予分けても南予地域とは日常的に交流が行われ、独特の地域文化が醸成されてきた。

大宮・宮崎遺跡は、四万十川の支流である日黒川と宮の川の合流地点に形成された河岸段丘上に立地しており標高122mを測る。遺跡から日黒川沿いに3kmの道のりで松野町である。当遺跡から松野町に至る地域は、西土佐村の中で最も平野の発達しているところで、村内最大の穀倉地帯を形成している。江戸時代の石高を見ても他の地域に比べて群を抜いている。

四万十川本流は西土佐村を蛇行しながら流れ、西から広見川や日黒川、東から藤の川川などの支流が込んでいる。四万十川本流やこれらの支流の通称駄場と呼ばれている河岸段丘には数多くの縄文時代の遺跡が確認されており、その分布密度は県下で最も高い。西土佐村で確認されている縄文時代の遺跡は16例。近隣の十和村や大正町を加えると36遺跡に達する。本格的な発掘調査が実施された遺跡は少ないが、代表的なものを挙げると縄紋草創期の尖頭器や隆起線紋土器の出土した十川駄場崎遺跡（十和村）、早期に属すると考えられる櫛節型の大型磨製石斧の出土した木屋ヶ内遺跡（大正町）、西土佐村内では両頭石斧が出土した藤の川流域の堂ヶ市遺跡、早・前期の広井駄場遺跡や沖遺跡などを挙げることができる。これら四万十川の中・上流域の遺跡について言えることは早・前期など縄文時代でも古い段階の遺跡が多く分布していることである。後・晩期の遺跡の多く見られる下流域とは対称的である。

続く弥生時代・古墳時代の遺跡はほとんど皆無であり、古代に属するものも僅少である。1988年に行なわれた本村半家遺跡（12）の調査で須恵器片が確認されているのみである。文献資料によれば建長二年（1250）幡多の大部分が一条氏の莊園となっていることが知られるが、下山郷と呼ばれていた当地域がその勢力圏に入っていたかどうかは明らかでない。文明元年（1469）には伊予の領内にあった可能性がある。戦国期に至って城跡など遺跡数の増加が顕著となるが、支配領域をめぐっての伊予側との緊張関係の高まりを投影したものであろう。代表的なものとしては辰巳城跡（6）、高手之城跡（10）、勝城跡（15）などを挙げることができる。これらの諸城は、河川の合流地点に臨む交通の要衝に築かれている。一条氏の滅亡後は、長宗我部の配下となり天正17年（1589）に検地が行なわれている。山内入国以後の下山郷は伊予との国境地帯と言うところから数多くの番所が置かれている。『西土佐村史』によれば正徳年（1716）に10箇所、天明期にはさらに3箇所が増設されている。

【参考文献】

- 『西土佐村史』高知県幡多郡西土佐村 1970年
岡本桂典『本村半家遺跡発掘調査報告書』西土佐村教育委員会 1989年
前田光雄『木屋ヶ内遺跡』高知県幡多郡大正町教育委員会 1995年
前田光雄『十川駄場崎遺跡－第5次発掘調査－』高知県幡多郡十和村教育委員会 1996年

Fig. 2 遺跡分布図 (1 : 50000)

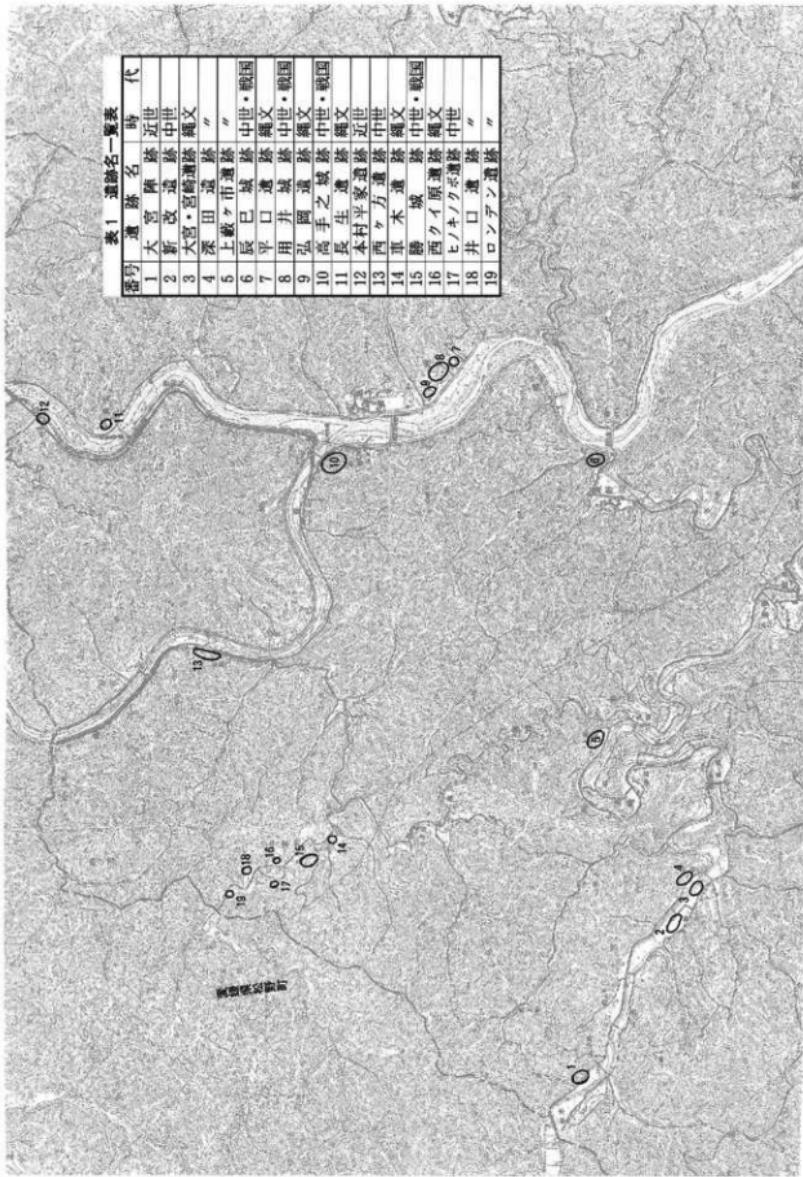


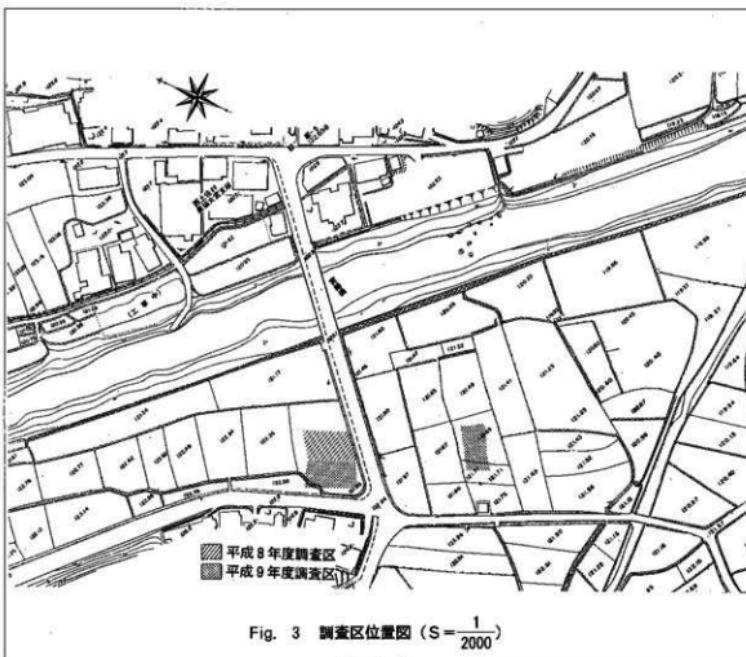
表1 遺跡名一覧表

番号	遺跡名	時代
1	大宮陣跡	近世
2	新改遺跡	中世
3	大宮・宮崎遺跡	縄文
4	深田遺跡	"
5	上牧ヶ市遺跡	"
6	辰巳城跡	中世・戦国
7	平口遺跡	縄文
8	平井城跡	中世・戦国
9	弘閑遺跡	縄文
10	高手之坂跡	中世・戦国
11	長生遺跡	縄文
12	本村半家遺跡	近世
13	西ヶ万遺跡	中世
14	重木遺跡	中世・戦国
15	勝城跡	中世
16	西クイ原遺跡	縄文
17	ヒノキノクノ遺跡	中世
18	井口遺跡	"
19	ロンドン遺跡	"

第Ⅲ章 調査の方法

平成9年度の調査は、8年度調査区に隣接した650m²の調査区をⅡ区、県道線を隔てて南方向に約50mの地点の250m²の調査区をⅢ区とした。Ⅱ区は昨年度調査の廃土が積まれていたため、重機とダンプカーを用いて廃土と耕作土の除去を行なった後に、人力による掘削を開始した。遺物の取り上げや遺構実測については、昨年度の調査で設定していた任意の基準杭（5m方眼、東西方向に東から0・1・2・3……、南北方向に北からA・B・C・D……）によった。基本層準の観察は、調査区のほぼ中央部に東西方向のセクションベルトを残し、これに直行するかたちで南に一本のセクションベルトを設定し基本層準の観察をおこなった。基本層準及び検出遺構、遺構セクションについては、20分の1を基本に図化を行なった。

Ⅲ区の調査は、20cm前後の水田耕土を人力で掘削除去し、縄文時代の包含層上面と思われる層準まで下げた。包含層上面には縄紋土器の分布が認められ、この下層には縄文時代の遺構の存在が予想される。しかしながらⅢ区の調査を開始した頃から、雨天が続き調査期間を考慮すると中途半端な調査となることが必至となり、今次調査においてはこの包含層以下については手をつけないこととした。



第IV章 調査の成果

1. II 区

[1] 基本層準

地表を形成する層厚20cm前後の現水田耕作土を除去した後に調査に入ったために、層準の観察は旧耕作土面から行った。

I層：灰色粘土質シルト層（旧耕作土）である。セクションベルト1、2ともに見られるが全体の広がりは認められない。

II層：旧耕作土の床土でセクションベルト2の一部にのみ認められる。

III層：暗灰色粘土質シルト層で、層厚5~20cmで全体に認められる安定した層準である。中近世の遺物包含層である。

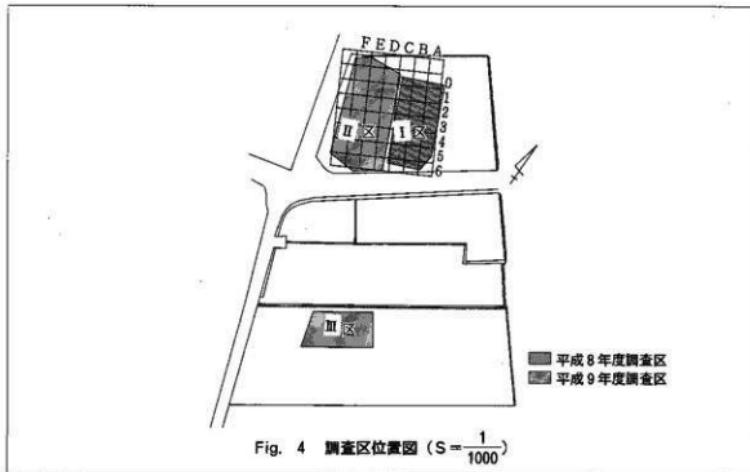
III'層：灰茶色シルト層でセクションベルト2の西端に堆積が見られる。遺構埋土の可能性もあるが平面的には把握できなかった。

IV層：黄褐色粘土質シルト層でセクションベルト1の一部に堆積が見られる。無遺物層である。

V層：音地層と呼ばれているアカホヤ火山灰層である。調査区全体に層厚20~30cmで堆積している。無遺物層である。

VI層：淡黄色粘土層で層厚40cmから70cm以上を測る。無遺物層である。

VII層：1~5cm大の礫混ざりの淡黄色粘土層で層厚30cm以上を測る。無遺物層である。



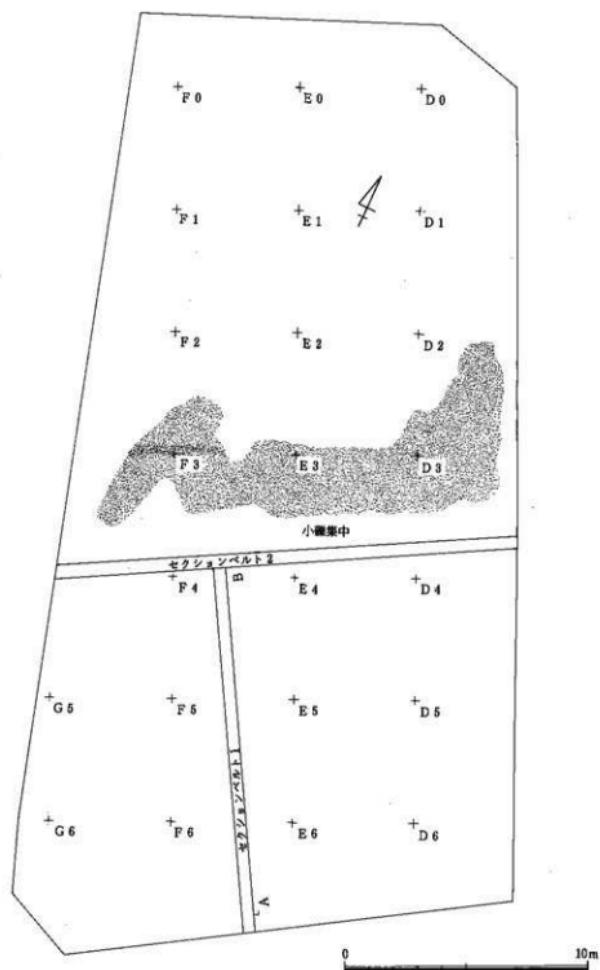
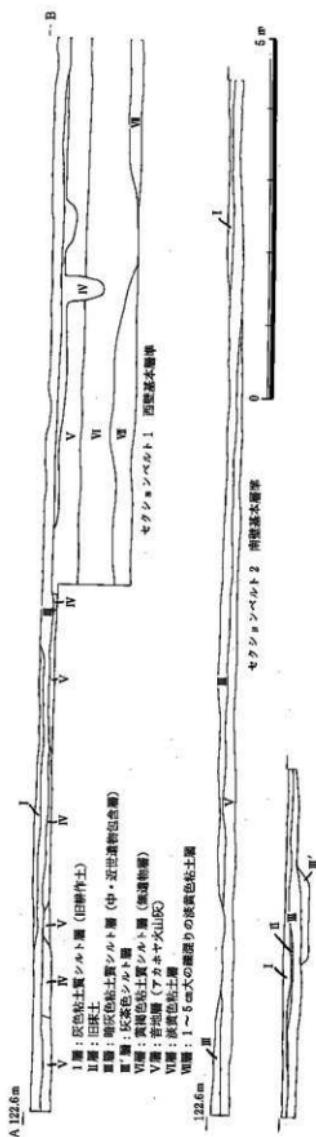


Fig. 5 セクションベルト、小礫集中出土地点位置図

Fig. 6 基本層



[2] 検出遺構と遺物

① 掘立柱建物

S B 1 (Fig. 8, 11)

調査区の北部にある梁間2間(3.7m~4m)桁行4間(7.76m)の建物で、棟方向はN-24.5°~Wである。柱穴掘り方は、比較的大きく長軸70~80cmを測る楕円形状を呈するものが多い。深さもほとんどのものが70cm前後を測る。P 3、P 5は掘り方の一部が突出しているが、柱を埋める際または抜き取りの際に生じたものと考えられる。これらの柱穴の中で、P 5、P 6、P 7、P 11の床には、長軸30~75cmの扁平な河原石を礎盤に置いている。またP 5とP 6の間には柱穴が認められないが、礎石として河原石が置かれている。出土遺物は、P 1の埋土中より青磁碗底部(3)と肥前産灰釉陶器碗(8)が、P 3より肥前産灰釉陶器碗(6)が、P 8より福建省産の染付皿(7)が出土している。6と8はともに外面部付近露胎で、露胎部は褐色に発色している。また高台脛を削り、6はしっかりした稜を有している。8も弱い稜をなし三日月高台で僅かに兜幅を有する。7は口縁内面に界線、見込に花紋を有し、蛇の目状に釉剥ぎを行っている。これらの遺物は何れも柱穴埋土中層よりや上から出土しているが、青磁碗底部(3)が15世紀代に属する以外はすべて17世紀初頭~前葉に時期比定できるものである。したがってS B 1の時期をこの頃に求めることができよう。

② 土坑

S K 1 (Fig. 9, 11)

調査区の南東隅に位置する。ほぼ東西方向に延びる長い土坑で東端は調査区外に出ている。短軸1.47m、長軸3m以上を測り、深さは40cm前後である。断面は逆台形状を呈する。埋土はI層：灰茶色シルト層、II層：灰色粘土質シルト層(炭化物を含む)、III層：茶灰色粘土質シルト層(炭化物を含む)で、II層より見込に印花紋を有する青磁碗の底部が出土している。

S K 2 (Fig. 9, 11)

S K 1の北隣に併行して位置している。東西方向に長軸を有する土坑で、最大幅は1.8mを測る。東端は調査区外に出ており、西側は細長い溝状に延びているが端部はつかめない。深さは10cm前後で床面は平坦な面をなすが、小ピットが2つ掘られている。埋土は茶灰色粘土質シルト層で、埋土中より繩文後期の鐘ヶ崎式土器(1)、白磁碗底部(2)、備前窯口縁部(9)が出土している。図示したもの以外に天目茶碗、備前壺、土師器皿の細片が出土している。2は高台外面まで施釉が及んでいる。16世紀後半~17世紀初頭の福建省産と考えられる。

S K 3 (Fig. 9, 11)

調査区の中央部に位置する。長軸3m、短軸2.2m、深さ10cmを測る不整形の土坑である。床面及び直上に貞岩の円錐、角錐を主体とした集石が認められた。埋土は灰茶色粘土質シルトで、埋土中より明代の染付碗(5)、土鍾(10・11)、図示したもの以外に土師器皿や近世陶器碗の細片が出土している。5は、口縁内面に界線、外面に波濤紋帶と芭蕉紋を施紋している。16世紀代の代表的な輸入陶磁器である。

S K 4 (Fig. 9)

長軸1.6m、短軸1.1mの隅丸長方形のプランを有し、二段に掘り込まれている。深さは西側のテラス部分で10cm、東側で20~30cmを測る。埋土は灰茶色粘土質シルトで、埋土中より青磁細片と釦

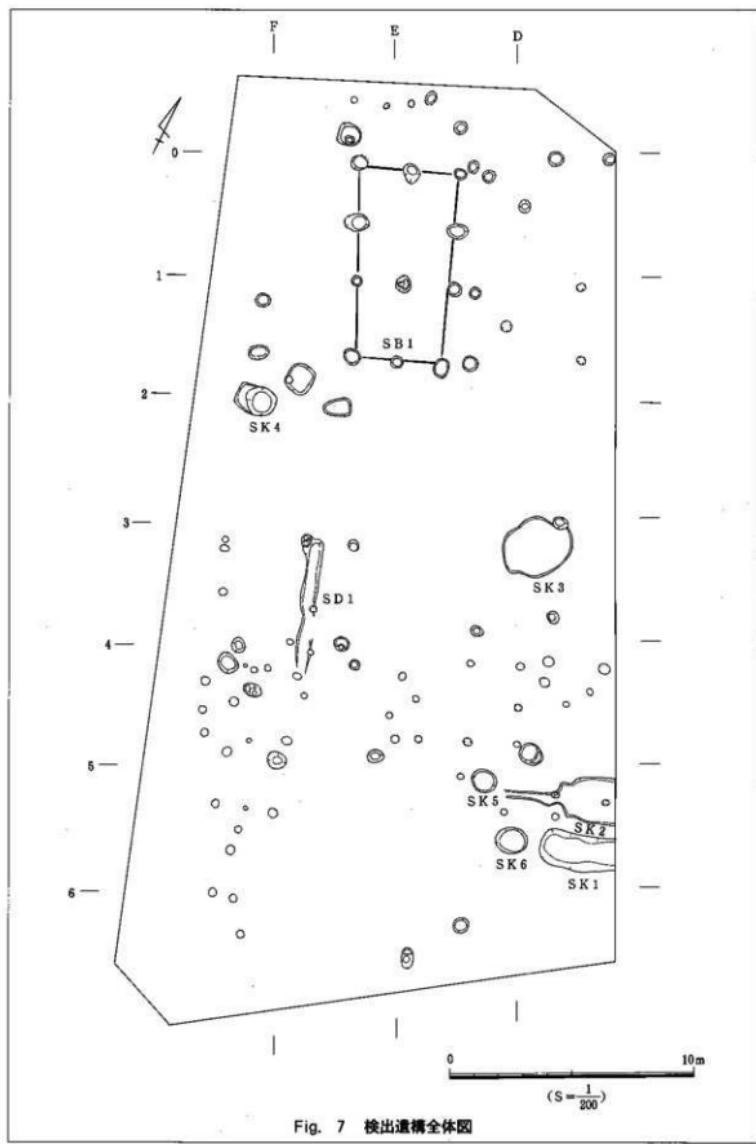


Fig. 7 検出遺構全体図

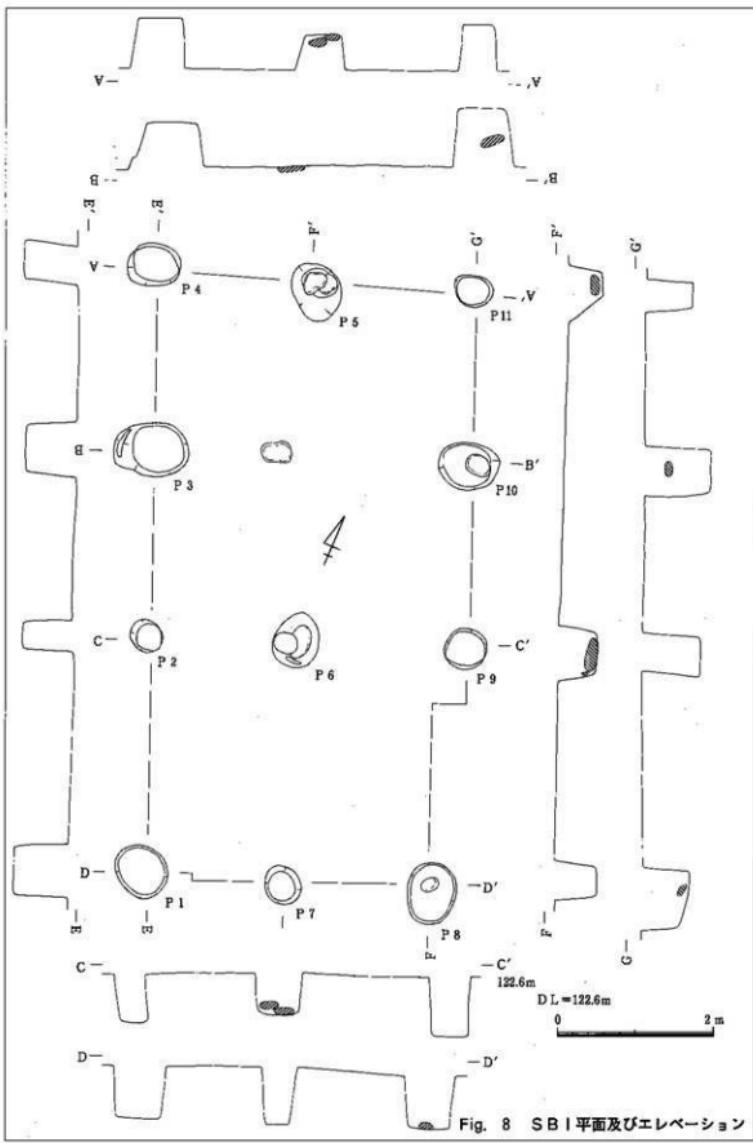


Fig. 8 SBI 平面及びエレベーション

が出土している。

S K 5 (Fig. 10)

S K 2 の東隣にあり、長軸1.0m、短軸0.9mの楕円形のプランを有し、深さは20cmを測る。埋土は灰茶色粘土質シルトで遺物は認められない。

S K 6 (Fig. 10)

S K 1 の東隣にあり長軸1.2m、短軸0.1mの楕円形のプランを有し、深さは30cmを測る。埋土は灰茶色粘土質シルトで遺物は認められない。

③ 溝

S D 1

調査区の中央部を南北方向に延びる溝で、幅50~60cm、延長6m、深さ15cm前後を測る。南に行くに従って浅くなり端部を明確におさえることができない。埋土は灰茶色粘土質シルトで遺物は認められない。

④ 集石状遺構 (Fig. 5、12~14)

調査区のほぼ中央部で長さ20m、幅5mでL字状に広がる小礫(1~5cm大)の集中が認められた。III層中に形成された整地層と考えられる。礫層中からはII層と同様の遺物が出土している。

縄文後期上器(13)、青磁碗底部(20)、白磁皿(30)、染付皿(37)、肥前産の皿(49)、京焼き風の碗(55)、肥前産の碗(60)、備前擂鉢(61、67)、鉄砲玉(69)である。13は、口縁外面に2条の押し引き風の沈線をほどこしている。伊吹町式土器である。20は見込みに花紋を印刻した龍泉窯系の青磁碗である。30の白磁皿は口縁部が外反するタイプで森田編年E類に属する。37は菖蒲底タイプの皿で小野編年のC類に属する。見込みに捻花、外面に芭蕉紋を有す。49は割り高台を有する鉄釉の皿で見込に砂止めが見られる。60は灰釉を施し外面にロクロ目が認められる。69の鉄砲玉は直径約1cm、重さは6.1gを測る。

[3] 包含層出土の遺物

① 土 器

縄紋土器 (Fig. 12~12、14~19)　すべて後期の深鉢である。12は口縁部外面に2条の沈線を押し引き風に施し沈線の間に刺突紋を巡らしている。14は口縁部に2条の沈線を配し沈線の間に連結しない沈線を配し端部にC字状沈線で止めている。15・16・18は胴部片である。15は鉤状の沈線の下に2条の沈線を配している。16は3条の沈線帯を2帯施してその間に波状紋を配し、更に直線紋帯に刺突紋と短沈線を巡らしている。18はR Lの縄紋を施している。17と19は粗製深鉢の口縁部である。17は肥厚した口縁部にRの短沈線を巡らし18は端部が僅かに内湾しておわっている。17は宿毛式、19は所属型式不明、他はすべて伊吹町式に属する。

a 輸入陶磁器

青磁碗 (Fig. 12~21~25)

21は見込みに花紋の印刻、24は無紋の底部である。23は口縁部外面に雷紋帯、22は細蓮弁紋、25は外面にかなりくずれた雷紋帯と蓮弁を配している。龍泉窯のものである。

白磁皿 (Fig. 12~26~29・31)

26は見込と疊付けに砂目、高台外面は斜めに削られている。朝鮮産の可能性がある。他はす

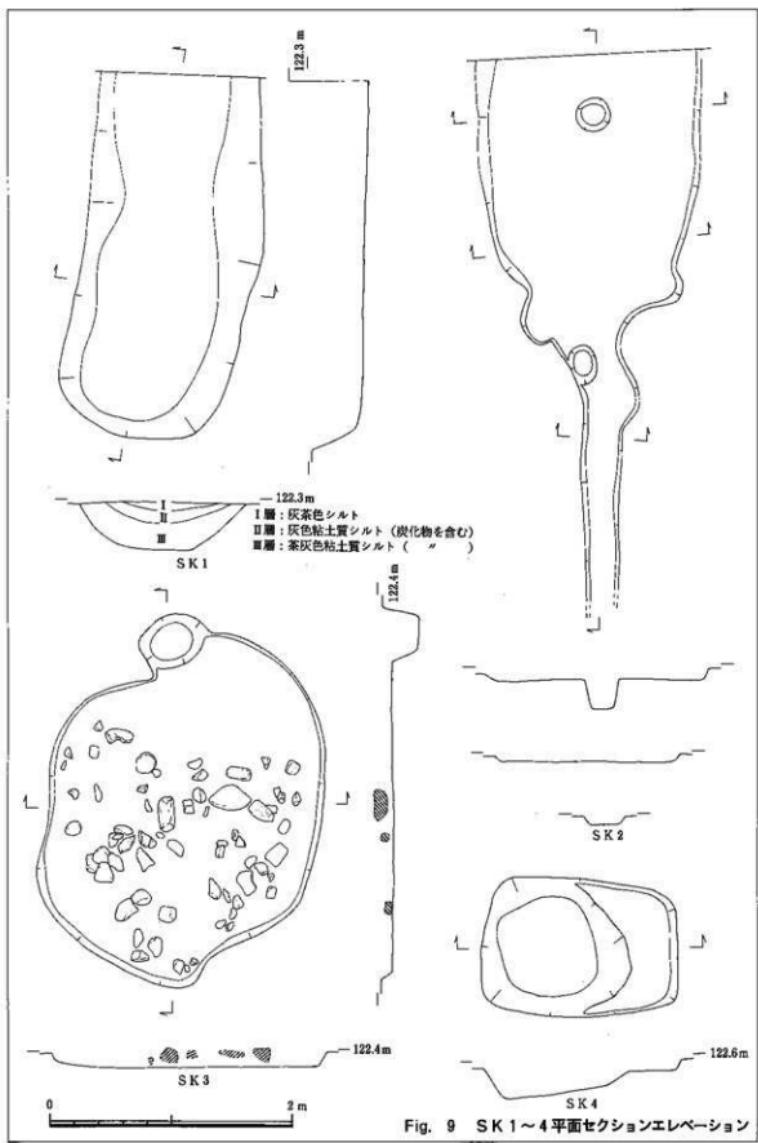


Fig. 9 SK 1~4 平面セクションエレベーション

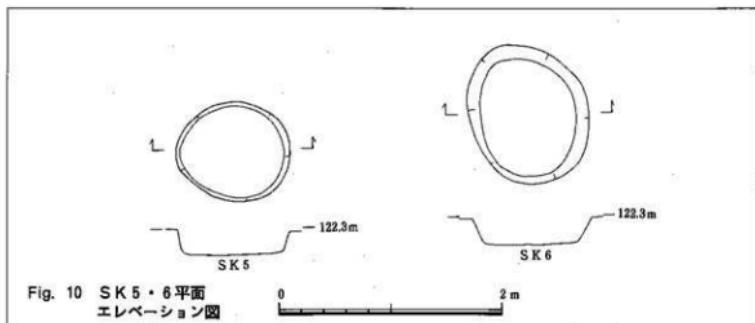


Fig. 10 SK 5・6 平面
エレベーション図

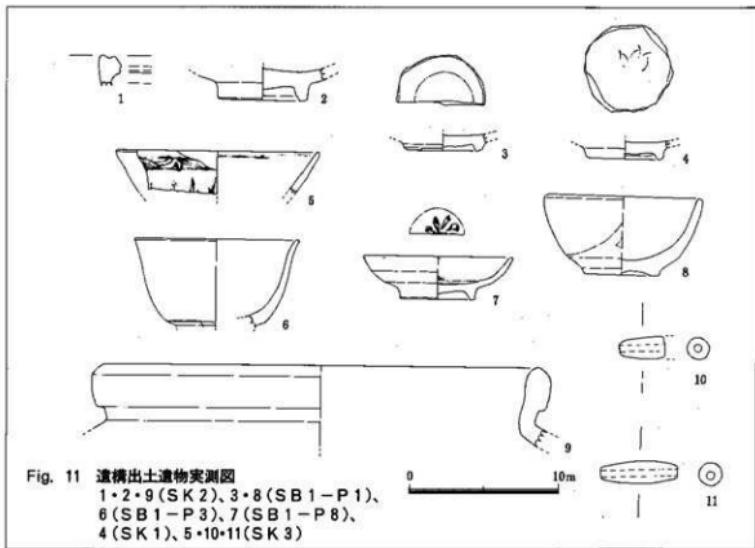


Fig. 11 遺構出土遺物実測図
1・2・9 (SK 2)、3・8 (SB 1-P 1)、
6 (SB 1-P 3)、7 (SB 1-P 8)、
4 (SK 1)、5・10・11 (SK 3)

べて口縁部端反のタイプで森田編年のB群に属するものである¹⁰。28は厚手の作りで外面にロク
ロ目を残し、見込は蛇の目の陶剥ぎが見られる。29は高台に砂が付着している。

染付瓶 (Fig. 12-33～35・39)

33は口縁部内面に界線、外面に波溝紋、体部外面に芭蕉紋が描かれている。34は陶胎染付碗
で体部外面に芭蕉紋が見られる。35は外面に結合紋を配している。39も陶胎染付で口縁部内面
に1条、外面に2条の界線、体部外面に連続紋を描いている。

染付皿 (Fig. 12-32・36・38・40)

32と38は小野編年の皿B群に属するものである¹¹。32は口縁部内面と見込に界線、外面に牡

丹唐草紋を配している。38は見込に十字花紋、外面に唐草紋を描いている。36は葵口底の皿で小野編年のC群に属する⁹。体部外面に芭蕉紋、腰部に1条の界線、見込に捻花を配している。40は口縁部内面と見込外縁に界線、外面に唐草紋を配している。高台内面に砂が付着している。天目茶碗 (Fig. 13-41・42)

41は外面下胴部まで鉄釉を施釉。体部は直線的に開き、高台脇を水平に削り出している。二次的に被熱している。42も鉄釉を施釉、口縁部が屈曲して立ち上がる。

b 国内産陶磁器

染付 (Fig. 13-51~54)

51は外面に草花紋を配した肥前系の碗である。52は口縁部内面に2条の界線、外面に波濤紋を描いている肥前系の可能性がある。53は内面に四方罫紋、外面に花唐草紋を配している。有田産で17世紀後半から18世紀のものである。54は外面に草花を配した小瓶で、底部外面に「大明成化年製」銘がある。肥前産で1660年代に属する。

陶器皿 (Fig. 13-44~48・50)

44・45・47・48は肥前産の灰釉小皿である。内面と体部下半まで施釉、47・48は砂目積が見られる。44・47・48は17世紀前葉、45は16世紀末から17世紀前葉の作である。46は肥前産の鉄絵灰釉小皿である。体部中位から屈曲して立ち上がり草紋を描く。外面は屈曲部以下露胎、三日月高台を有し見込には胎土目積みが見られる。16世紀末から17世紀初頭のものである。50は肥前産の刷毛目象眼紋皿で見込に印花紋を施し、砂目積が見られる。透明釉は焼成不良のため白濁している。17世紀前半のものである。

碗 (Fig. 14-55・56・58~60)

55は、京焼風陶器の底部で異器手碗と呼ばれるものである。透明釉には貫入が見られ疊付は釉をカキっている。肥前系または在地の尾戸焼きと考えられる。17世紀後半代のものである。56は、透明釉を施した磁器碗で産地は不明である。58~60は肥前産の灰釉陶器碗で、17世紀前半のものである。

天目茶碗 (Fig. 14-43)

鉄釉の瀬戸天目である。15世紀前半に属する。

擂鉢 (Fig. 14-61~65・67)

すべて備前産の擂鉢である。L字縁部の立ち上がりが発達している。

その他 (Fig. 14-57・66・68)

57は土師器皿で外面が焼けている。灯明皿として使われたものであろう。66は備前の片口壺である。上胴部に以上の沈線が巡る。68は土鍤である。長さ4.4cm、最大径1.5cm、孔径0.5cm、重さ8.5gを測る。

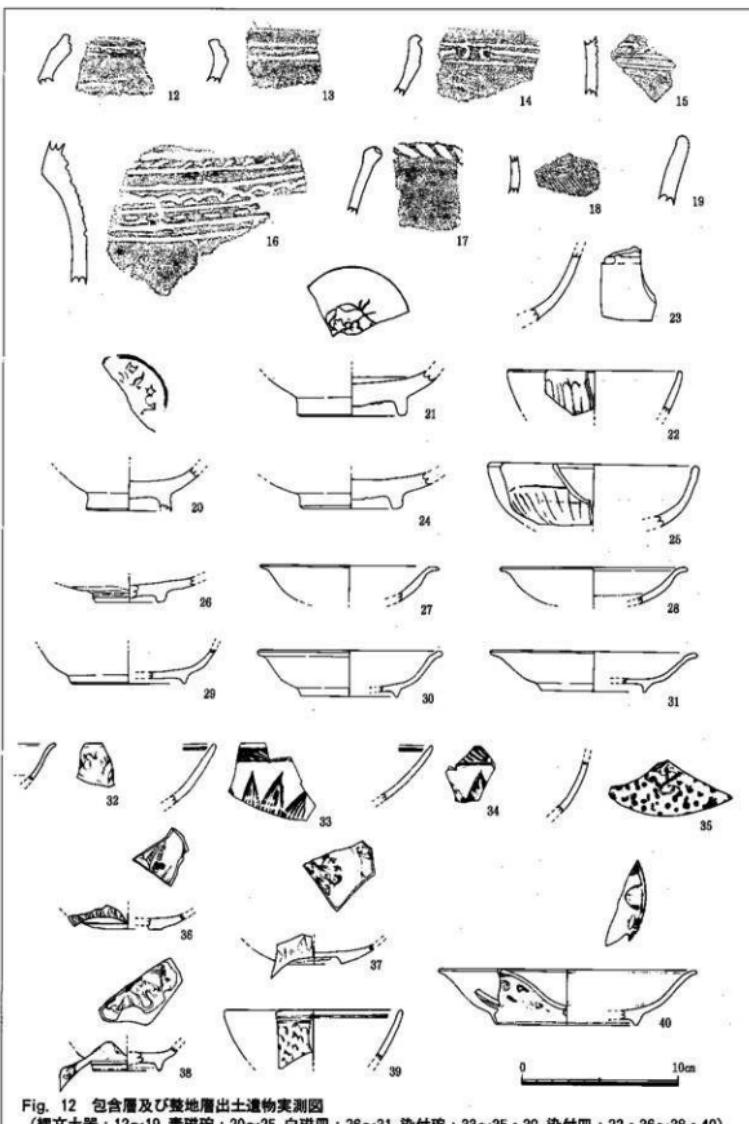


Fig. 12 包含層及び敷地層出土遺物実測図
(縄文土器 : 12~19、青磁碗 : 20~25、白磁皿 : 26~31、染付碗 : 33~35・39、染付皿 : 32・36~38・40)

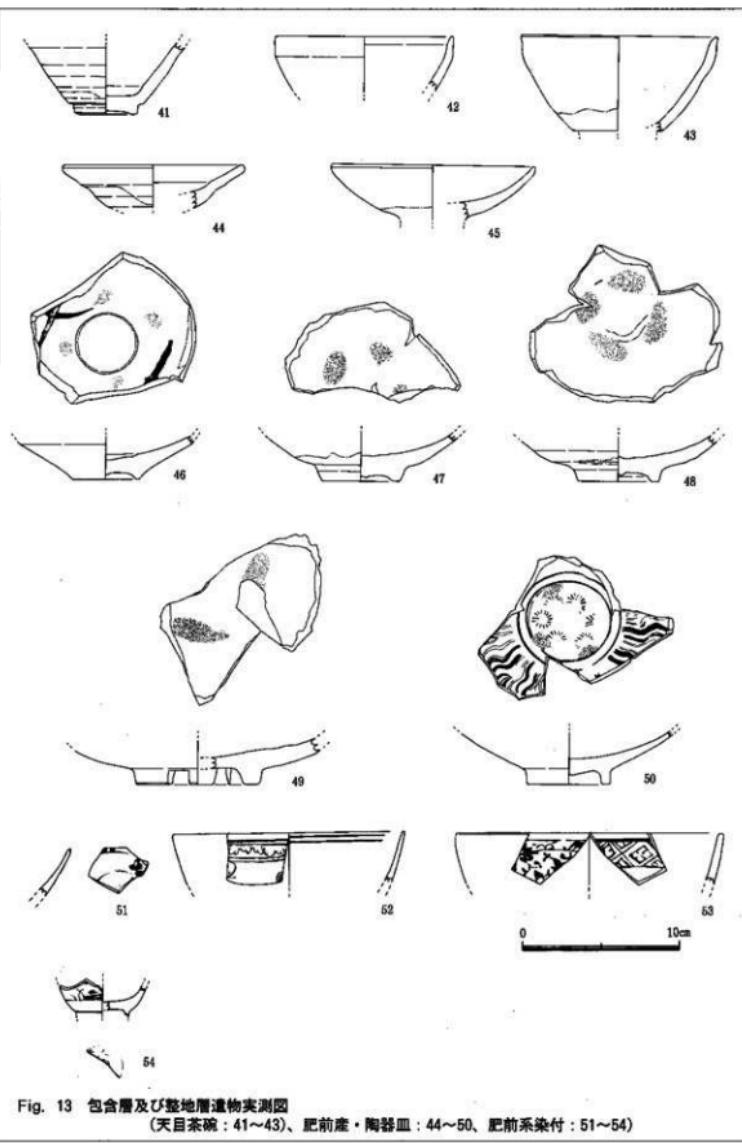


Fig. 13 包含層及び整地層遺物実測図
(天目茶碗: 41~43)、肥前産・陶器皿: 44~50、肥前系染付: 51~54)

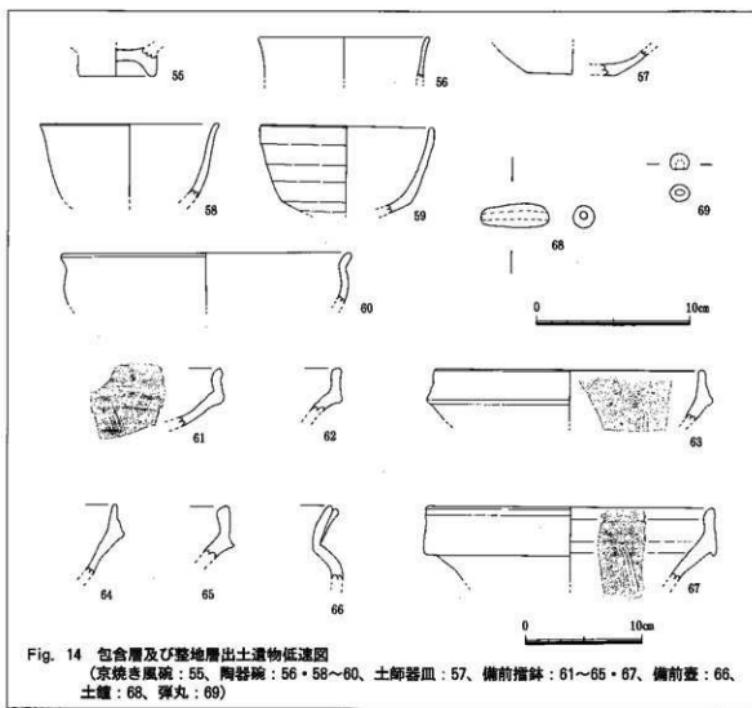


Fig. 14 包含層及び整地層出土遺物低速図

(京焼き風碗 : 55、陶器碗 : 56・58~60、土師器皿 : 57、備前椎鉢 : 61~65・67、備前壺 : 66、土罐 : 68、弾丸 : 69)

註 (1) 森田 励「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会1982年
 (2) 小野正敏「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会1982年

② 石 器

今回の調査で出土した石器類の総数242点で内訳は石鎌13点、削器1点、磨製石斧1点、石錐2点、磨石1点、石核4点、剥片約220点である。出土状況

はすべての石器が他の時代のものと混在する状態で出土しており、造構に伴うものは僅かに2点のみで、出土分布状況は掲めていない。ただ調査区のE 4~E 6、D 4~D 6から比較的多く出土する傾向を少し読み取

表2 石器一覧表

器種	頁岩	珪質頁岩	黒曜石	サスカイト	チャート	砂岩	花崗岩	合計
石鎌	2	2	3	4	2	0	0	13
削器	1	0	0	0	0	0	0	1
石斧	1	0	0	0	0	0	0	1
石錐	1	0	0	0	0	1	0	2
磨石	0	0	0	0	0	0	1	1
石核	4	0	0	0	0	0	0	4
剥片	200	10	4	1	4	0	0	220
合計	209	12	7	5	6	1	1	242
重さ(g)	13,387	167	16	81	12	24	438	14,125

れる程度である。また層位的にはアカホヤより上の層位で出土している。

1次調査での遺物出土状況の所見は未発表な為、具体的な内容に欠けるものの、縄文時代後期後半の配石造構より多くの石器類が出土しており、またアカホヤ層の上層からの出土であることから、今回出土の石器群も単純に考えれば縄文時代後期の可能性が強いものと考えられる。しかしながら、1次調査においては縄文時代のアカホヤより上層の縄文時代遺物包含層からは後期を主体としながらも、僅かではあるが前期轟式、羽島下層式も出土しており、また早期後半の山形押型文も出土していることから、前期初頭の時期も若干ながら可能性は残されている。

a. 石 鋸 (Fig.15-1~10)

石鋸は13点出土しており、その内の10点を図示した。脚の形態により以下の4類に分類を行った。

1類ー脚の長いもの。No.1の1点のみ。サヌカイト製で0.2gのやや小形のもので、器肉が極めて薄い。

2類ー凹基のもの。No.2~5の4点。2~4は黒曜石製、5はチャート製である。2・3は0.4gの小形、4・5は0.7gの中形である。片脚部を欠損するものが多い。

3類ー平基に近いもの。僅かに脚が付く。No.6~8の3点。6がチャート、7が珪質頁岩、8はサヌカイト製である。重さは0.5~0.9gである。3点共に先端部が欠損する。

4類ー平基のもの。No.9、10の2点。9は頁岩、10は珪質頁岩製である。10は扁平なもので側刃のみに調整を施す。

石材は搬入石材のサヌカイト4点、黒曜石3点、在地産の頁岩・珪質頁岩・チャート各2点ずつ6点である。搬入品石材の石製品が若干多く出している。

重量はNo.1の0.2gが小形のもので、次いで0.4~0.6gのものが5点、0.7~0.9gのものが4点である。近隣の十川駄場崎遺跡、木屋ヶ内遺跡では超大型品は認められているが、本遺跡では標準的な大きさのものしか出土していない。

b. 削 器 (Fig.16-11)

No.11のみ1点である。亜円錐からの横長剥片を素材とするもので、形状は三口月形を呈する。裏面には調整加工を施さず、表面には礫面を残すものの、上方から調整加工を施す。刃部は僅かに、調整加工と刃歯れの微細剥離が認められる。石質は頁岩である。

c. 磨 製 石 斧 (Fig.16-12)

今次調査では石斧類はNo.12の1点のみである。定角式に近いもので、両側刃を顯著に研磨し、面状になる。全体の形状は基部がすぼまり、刃部先端部はやや丸みを持ち、断面はやや丸みを持った片刃である。表裏面共に研磨しており、基部先端に敲打痕が認められる。長さは11.06cmを測り、石質は頁岩と考えられる。

d. 石 鋸 (Fig.16-13、14)

No.13、14の2点のみである。14はSK2からの出土である。共に長軸両端を打ち欠き抉入部を作出している。13は23.9gでやや小形のものである。

e. 磨 製 石 (Fig.16-15)

花崗岩製で上面・下面共に平坦で研磨され、側面は僅かに研磨痕が残るのみで、全体的に荒い。

f. 石 核 (Fig.16-16、17)

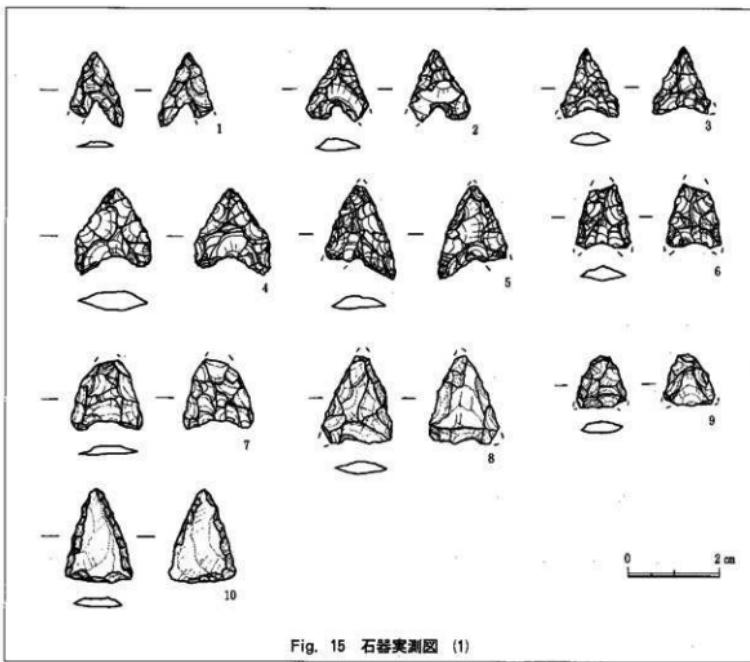


Fig. 15 石器実測図 (1)

石核は4点出土しており、その内2点を図示した。No16は円盤状に近い石核で表裏面共に側辺部から全周に交互剥離を行う。表面には部分的に自然面を残す。剥離痕に階段状剥離が認められるものの、ラウンドスクレイパーのように刃部は形成しない。No17は大形の石核で、表面に大部分自然面を残しており、裏面にも荒い剥離痕が認められる。図示しなかった他の2点共にこのタイプのものである。

g. 剥 片 (Fig. 17-18~31)

剥片の点数は約220点である。図示したのは14点である。石質別の内訳は頁岩200点(91%)、珪質頁岩10点(4.6%)、黒曜石4点(1.8%)、チャート4点(1.8%)、サムカイト1点(0.5%)である。以下の7類に分類を行った。

1類-No18. 横長剥片で打面は織面。主要剥離面と背面剥離方向が同一のもの。

2類-No19~21. 平坦打面で、主要剥離方向と背面剥離方向が同一で背面剥離数が2つ以上のもの。

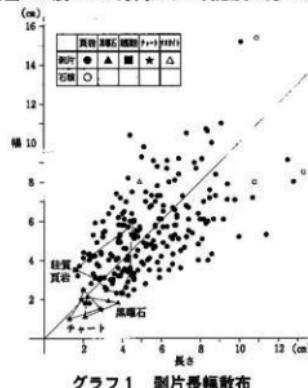
3類-No22, 23. 打面が切り子状で、主要剥離方向と背面剥離方向が違うもの。また背面剥離痕が2つ以上有する。

4類-No24~28. 打面が点状、線状のもので、主要剥離方向と背面剥離方向を違え、背面の剥離痕を2つ以上有するもの。

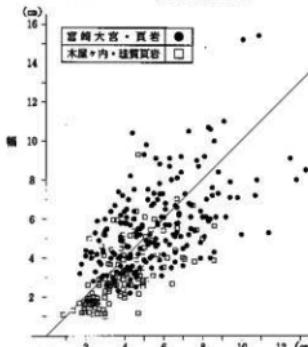
- 5類-Na29.縦長剥片で打面は平坦。背面剥離方向は主要剥離方向と違え、剥離痕を2つ以上有する。
 6類-Na30.線状打面で主要剥離と背面剥離方向が同一で背面剥離は1つで表面を残すもの。
 7類-Na31.主要剥離面の打面が除去されたもの。背面には幾つかの方向からの剥離痕が認められるもの。石核の可能性もある。

頁岩製剥片の大きさは4~8cm内の分布が標準であり、8cm以上11cmのやや大形のものも一定の割合で分布するようである。珪質頁岩は6cm以内、黒曜石は4cm以内、チャートは4~8cm以内に納まるようである。それから言えば頁岩製剥片には大部分が3cm以上のもので占められているところから、他の石材に比べて大形であることが明瞭である（グラフ1）。厚さについてもグラフ化しなかったものの、相対的に肉厚である。剥片の形態自体も頁岩と珪質頁岩は先の剥片分類に該当するものが多いものの、チャート・黒曜石は抽出が困難な剥片で占められている。

頁岩は縦長剥片。横長剥片共にほぼ均等に出土しており、近隣の大正町木屋ヶ内遺跡の珪質頁岩と比較を行った場合、木屋ヶ内遺跡の珪質頁岩には小形の縦長剥片がやや多い傾向を示している（グラフ2）。木屋ヶ内遺跡の剥片は早期後後に含まれることから、この差異が時期によるものか、石質によるものか、または目的素材の差異かは判断しないものの、大宮・宮崎遺跡での珪質頁岩のあり方も木屋ヶ内遺跡と同様であるところから、時期差よりも石材による差異の方が大きいものと考えられる。このことは愛媛県広見町岩谷遺跡の配石遺構内からも頁岩製剥片及び削器が多量に出土しているところからも言えようである。



グラフ1 剥片長幅散布



グラフ2 大宮・宮崎、木屋ヶ内遺跡剥片対比

2. III 区

先述のように耕作土（層厚20cm）を除去し、遺物包含層の存在を確認した。耕作土中から近世陶磁器、繩文土器の細片が出土している。遺物包含層上面には人頭大の円窪や繩文土器片が散見された。II区の包含層と異なり中近世遺物は認められなかった。純粹な繩文土器の包含層の可能性がある。

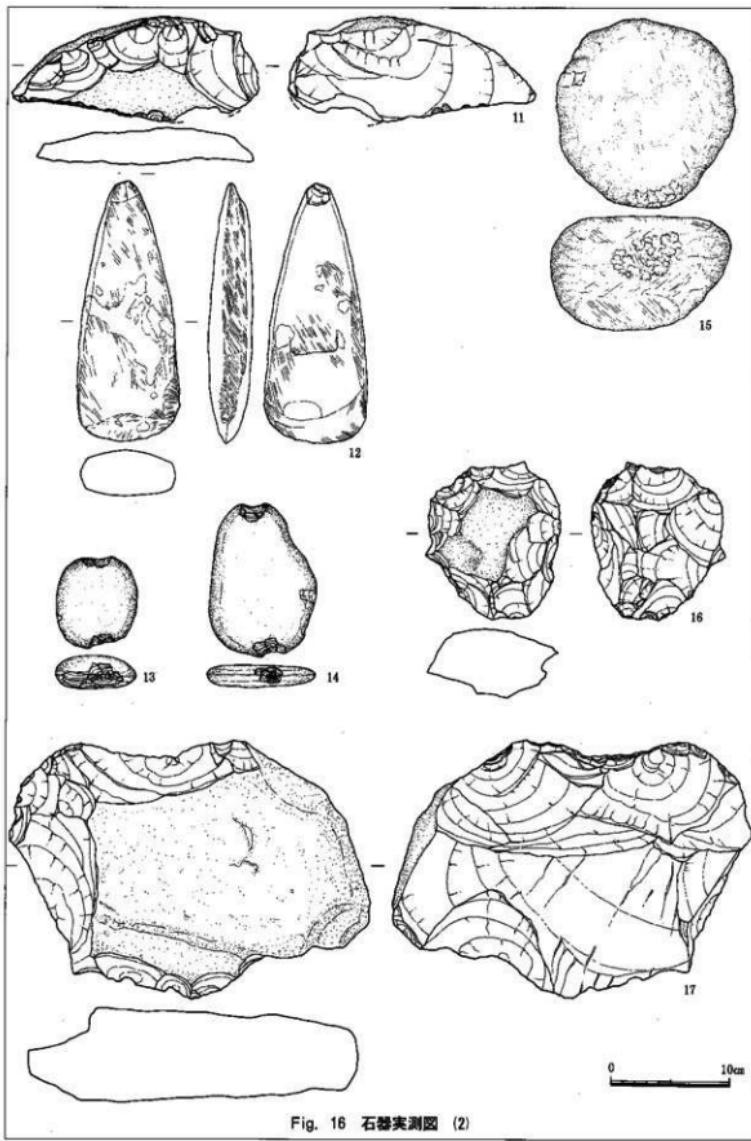


Fig. 16 石器実測図 (2)

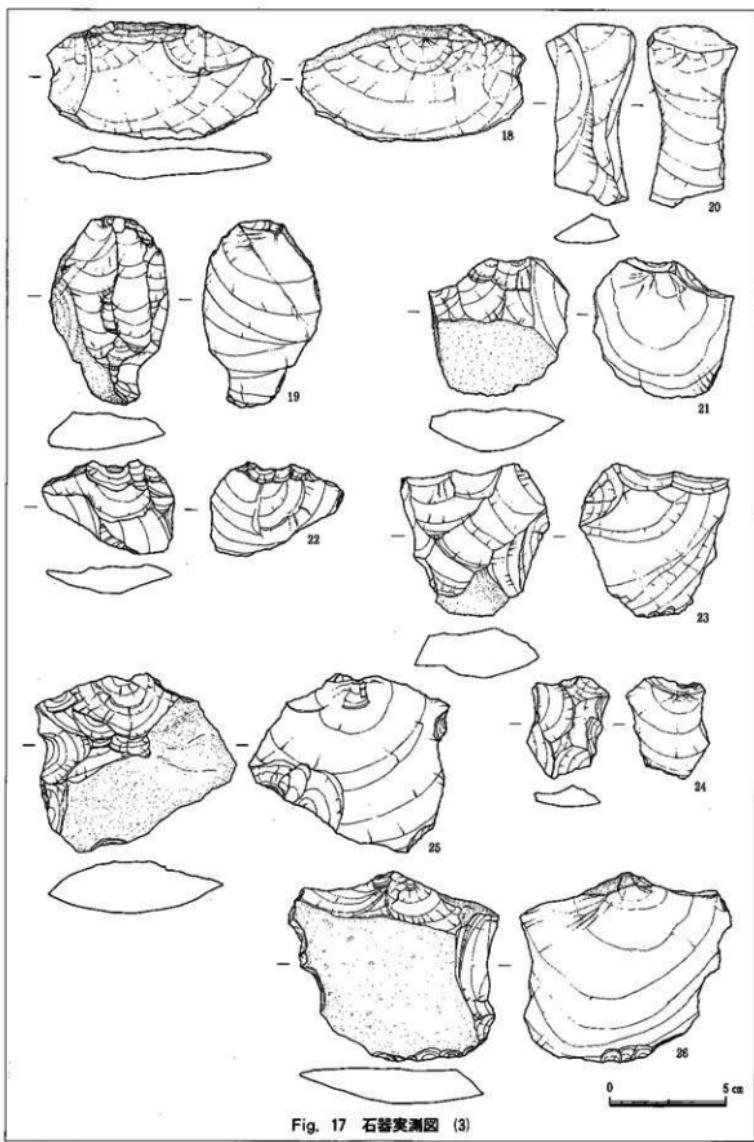


Fig. 17 石器実測図 (3)

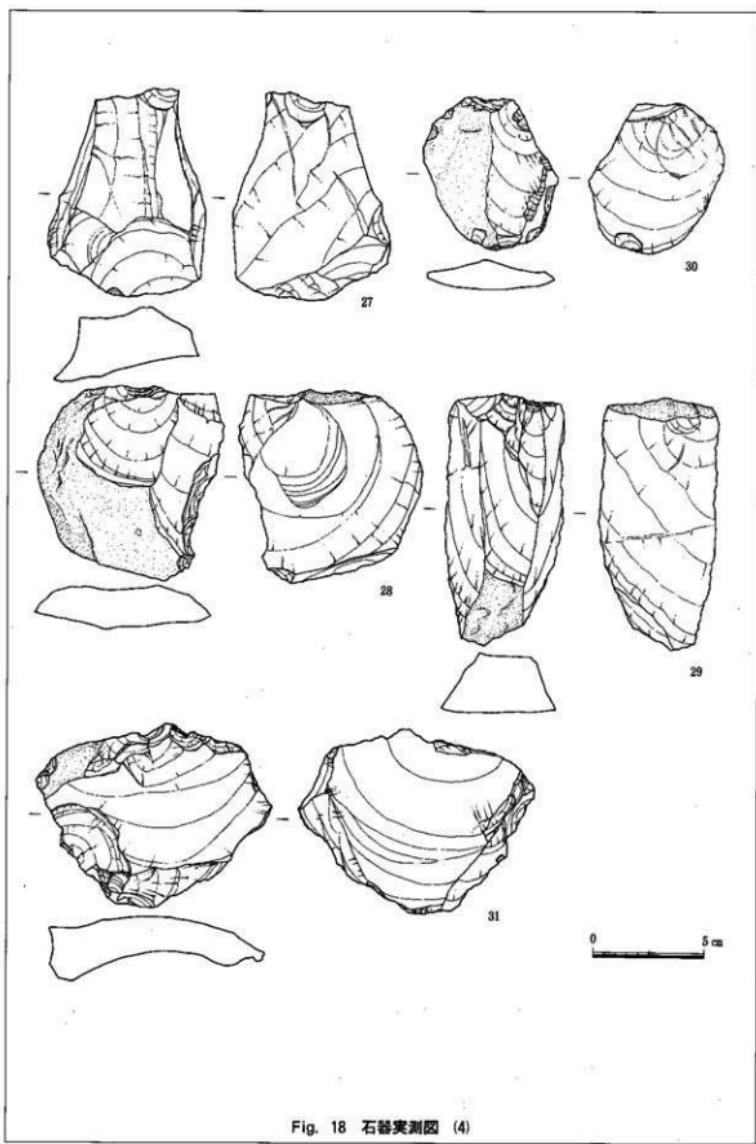


Fig. 18 石器実測図 (4)

第V章 考察

大宮・宮崎遺跡出土の陶磁器類と遺跡の性格

出 原 恵 三

今回の調査の目的は、平成8年度の調査で明らかとなった縄文時代後期を中心とする祭祀遺構・遺物の広がりを確認するところにあった。珪片一本を隔てただけの隣接地であたにもかかわらず、祭祀遺構はその片鱗も認めるることはできなかった。これは今回の調査区が近世初頭の遺構群に搅乱されていることのみに原因するものではなく、縄文時代の祭祀が極めて限定された地点で行われていたことを示しているものと考えられる。

しかしながら今次調査においては、15世紀後半から17世紀前半代の貿易陶磁器・国産陶器類がまとまりをもって出土している。その大半が包含層出土ではあるが、遺構出土土器の時期とも一致し、当遺跡の消長を示しているものと考えられる。ここでは、器種別にその特徴を抽出し、時間的な位置付けを行なった上で、高知県下の他の遺跡との比較検討を行ない、その上で遺跡の性格について考察を試みるものである。

なお、貿易陶磁器の分類編年は、染付については小野正敏氏、白磁については森田勉氏、青磁については亀井明徳の論文に依った⁽¹⁾。

[1] 陶 磁 器 類

① 貿易陶磁

青 磁

図化し得たものは8点であるが、細片を含めて36点出土している。碗の他に稜花皿や皿が見られる。碗の中で、外側の紋様やその有無の識別できる資料は16点であるが、その内9点が細蓮弁文を有するものである。更に細蓮弁文の中では、蓮弁としての単位を保ち片切彫りによるB₁類とされるものが4点、いわゆる線描きによるB₂類とされているものが5点出土している。この他図示した雷文帯を有するものが2点(23・25)、無文が4点見られる。碗の底部は8点出土しているが、その内の4例の見込みに印花文が施されている。これらの青磁の中で23が15世紀代、25が16世紀後半～17世紀初頭に比定されるものであるが、他の多くは15世紀後半～16世紀前半に属するものである。25は本県では出土例が僅少で、本例の他に中村城跡⁽²⁾の堅堀1より出土している。

白 磁

白磁として判別できたものは29点である。碗が2点、他はすべて皿であり、しかも1点(26)を除いて端反りの小皿で占められている。26は朝鮮産の可能性がある。⁽³⁾

これらの小皿はアーチ状高台を有するタイプの次に出現するもので、森田編年のE群に属し、從来は15世紀後半～16世紀末に比定されてきたものであるが、最近ではその一部が17世紀初頭まで残存すると言う指摘もある。⁽⁴⁾

表3 15~16世紀の土器・
陶磁器組成

	品種	点数(%)
貿易陶磁	青 磁	36(16.7)
	白 磁	29(13.5)
	染付	36(16.7)
	天 目	2(0.9)
	小 計	103(47.8)
	備 前	98(45.6)
	瀬戸・美濃	2(0.9)
国内産	土 師 器	12(5.6)
	小 計	112(52.1)
合 計		215(99.9)

表4 高知県西南部の遺跡出土貿易陶磁器組成(カッコ内は%)

遺跡名	青 磁	白 磁	染付	計
大宮・宮崎遺跡	36点(35.6)	29点(28.7)	36点(35.6)	101点
扇 城	260点(92.2)	13点(4.6)	9点(3.2)	282点
上長谷遺跡	149点(74.5)	24点(12)	27点(13.5)	200点
ハナノシロ城跡	17点(89.5)	2点(10.5)		19点
中村城跡	210点(63.3)	24点(7.3)	96点(29)	330点

染付

染付は53点出土している。碗と皿からなっており両者ともにいくつかのグループに別けることができる。碗の中で時期比定を確実にすることのできるものは、芭蕉文と波濤文を有するタイプ(5・33・34)や結合文を有するタイプ(35・39)で小野編年のC群に属するものである。後者は図示したもの以外に細片が1点出土している。他は細片が多く文様構成などを十分に把握しえない。口縁部の形態では外反口縁の例は全く見られず、いわゆるレンツー碗に属するものがほとんどである。従って時期的にはほとんど16世紀代のなかで納まるものである。

皿は小振りのものと大振りのものとがあり前者が圧倒的に多い。小振りのものは、小野編年の皿B群が図示したもの(32・38・40)を含めて5点、基筒底タイプのC群が2点(36・37)、この他図示し得なかったが高台内に「大明年製」銘のあるB類あるいはE類と考えられる細片や17世紀初頭に比定される7が見られる。大振りのものは細片が2点出土しており、うち1点は芙蓉手皿で16世紀末~17世紀初頭に位置づけることができるものである。以上の他に福建広東系の碗・皿の細片が7点出土している。

天 目

口縁部(42)と底部(41)を図示したが両者は同一個体の可能性がある。

② 国産陶器

瀬戸天目

図示したもの(43)の他に細片が1点出土している。43は古瀬戸後期III期に比定できるもので、15世紀代に属する⁶。他の1点は同II期に遡る可能性がある。

肥前系陶器

細片を含めると60点余り出土している。皿と碗があり前者が多いようである。皿は、灰釉を施したもののが最も多く(44・45・47・48)、鉄釉(49)、灰釉に鉄絵(46)、象嵌と柳崩毛目(50)などが見られる。46は胎土目模であり大橋編年のI期に属するものである⁷。他のものは砂目模で概ね同II期に属する。碗も灰釉で占められているが、形態的には3タイプに別けることができる。口縁部が内湾するもの(8)、口縁部が外反するもの(6・58・60)、腰折れ風の(59)がある。これらの碗も大橋編年のII期に属するものである。

備前焼

図示し得たものは播鉢6点(61~65・67)、片口壺1点(66)であるが出土破片数では最も多い。時期的には真壁縫年Ⅴ期に属するものである。

③ 土師器

細片は、すべて取り上げても12点である。

以上の他にも肥前系の磁器や在地産の陶磁器と考えられるものが多数出土しているが、図示したもの以外は小細片であり、時間幅も17世紀後半~19世紀にわたっており、後世の混入の可能性が高い。したがって今回の報告からは割愛した。

[2] 大宮・宮崎遺跡出土陶磁器類の位置付け

以上陶磁器類を中心に個別にその特徴を見てきた。すでに明らかのように、これらの遺物は貿易陶磁器を中心とする前半期と肥前系陶器が一般化する後半期とに大きく別けることができる。

前半期の特徴として必ず挙げなければならないことは、表に示したように47.8%と言う貿易陶磁器の組成比率に占める割合の高さである。当該期の貿易陶磁器組成比率は、県西南部の遺跡が県中央部の高知平野及びその周辺の遺跡と比べて群を抜いて高いと言う傾向が窺える。例えば上長谷遺跡^a47.2%、扇城^b約30%、ハナノシロ城^c19%、中村城^d7.7%である。今回の大宮・宮崎遺跡の比率は、上長谷遺跡とともに西南部地域のなかでも高比率を保っていると言うことができる。ちなみに県中央部の事例を挙げると、芳原城(1次調査)^e1.5%、美良布遺跡^f2.65%、姫野々城^g3.2%、岡豊城^h0.9%、吉良城(1次調査)ⁱ16.3%であり、両地域の間に歴然とした差異がある。次に貿易陶磁器の組成について見ると青磁と染付が35%、白磁が28%である。これを周辺の遺跡と比較すると表のようになる。大宮・宮崎遺跡は、他の諸遺跡に比べて白磁と染付が高比率を、青磁の比率が低いことを示している。これは各遺跡の終焉の時期差を端的に投影しているものと考えられる。

大宮・宮崎遺跡の場合、白磁についてはすでに述べたように圧倒的多数が皿E群によっており、扇城とハナノシロの白磁にはE群は見られず、その先行型態である皿D群で占められている。中村城においては皿E群のみ、上長谷遺跡では皿D群・E群が見られる。次に染付を見ると、大宮・宮崎遺跡では碗・皿があり、碗はC群を中心に、皿はB₁群とC群で構成され、皿と碗はほぼ同数か碗が多い傾向にある。ハナノシロ城では染付は見られず、扇城では皿B₁群が少數、中村城では皿B₁群、C群が多く出土しているが、碗は僅少である。以上のことから大宮・宮崎遺跡の白磁、染付けの高比率は白磁皿C群や染付け碗C群・皿C群によっていることが理解できる。この三者による明瞭な組み合せが確認できる遺跡は、高知県下においては1588年に廃絶したことが明らかとなっている長宗我部氏の居城岡豊城のみである。

後半期で注目すべきものは、肥前座陶器である。高知県における近世初頭の供膳形態の具体像を知る上で貴重な資料である。この種の資料がまとまって出土した例は田村遺跡を挙げができるが、その他遺跡においては散発的な出土に留まっている。今次資料は、胎土日積みの見られる人櫛縫年のI期に属するものが1点、他はII期に属するものである。消費地における肥前系陶器の初現は堺や京

都の例から天正10年代に求められている。本県において、実年代を明らかにし得る出土例はほとんどないが、先に挙げた岡豊城からは出土が見られず、1601年から山内氏が築城を開始した高知城⁹の土坑SK3からI期の皿・碗が出ており、おおよその目安とすることはできよう。したがって今次調査結果を見る限りにおいては、17世紀初頭前後に供膳形態が貿易陶磁器を主体とするものから国内産陶器に移行していったことが窺える。当遺跡はこのような移行の実態を示す県下ではまだ数少ない遺跡として捉えることができよう。

今次調査出土遺物の主体である陶磁器類は、そのほとんどが包含層出土のものであると言う制約があるものの、15世紀後半代～16世紀代の貿易陶磁器を中心とするものから16世紀末～17世紀前半の肥前系陶器を中心とする供膳形態への移行過程を実にスムーズに辿ることのできる資料として位置付けができるものである。

[3] 大宮・宮崎遺跡の性格とその消長

今次調査においては、掘立柱建物SB1と数基の土坑、条の溝、柱穴と考えられるピット多数を検出した。これらの諸遺構はすでに見てきたように15世紀後半期から開始され17世紀前半頃までおおよそ200年間にわたって継続して営まれた遺跡として捉えることができる。しかしながら個々の遺構の性格について、あるいはそれらの総体としての遺跡の性格について明らかな位置付けをすることは難しい。ただ遺跡の立地や大型の掘立柱建物、出土遺物から判断して、山城などに伴う屋敷地や一般農民の居宅などとは異なるものと考えられる。冒頭に述べたように当地は、土佐と伊予との国境に位置し(当時の国境線を明らかにすることはできないが)、しかも河川に臨んでおり、相互交流の要衝にあることから、公共性を帯びた交通番所、交易の場、一種の河津と捉てもよい。或いは神社のような信仰の対象となった施設の存在が考えられよう。当該期の調査事例としては、城跡やそれに付随した屋敷跡などが多く見られるのに対して、これまでに余り類似例を見ない性格の遺跡として位置付けることができよう。

表5 出土遺物から見た高知県の15世紀～17世紀の遺跡消長

遺跡名	15世紀	16世紀	17世紀
大宮・宮崎遺跡	■		
田村遺跡	■		
姫野々城跡	■	■	
芳原城跡	■	■	
小籠遺跡			■
岡豊城跡	■	■	
高知城跡			■
十万遺跡	■	■	■ ■ ■ ■
美良布遺跡	■		
中村城跡	■	■	
上長谷遺跡	■	■	
屬城跡	■		
ハナノシロ城跡	■		
中村一条氏遺跡	■		■

次にこのような遺跡の性格とその消長との関係について見てみたい。当該期の調査事例としては先に触れたように、城跡や城跡と関連した屋敷跡などが多く、近年特に資料の蓄積がはかられている。その場合中世・戦国期に属するもの多くは、15世紀代に遺跡の営みが開始され16世紀後半、或いは16世紀末頃に終焉し17世紀にまで継続する例は僅少である。また17世紀以降に営まれる近世の遺跡は、それ以前の遺跡との間に繼続性を持たず新たにその経営が開始されるのである。図示したように前者の例として主なものを挙げると芳原城跡、上長谷遺跡、姫野々城跡、十万遺跡^①、美良布遺跡、岡豊城跡などがある。後者は、小笠遺跡^②、土佐中村一条氏遺跡^③、高知城を挙げることができる。中世・戦国期から近世へと断絶することなく經營された遺跡は僅かに田村遺跡のみである。戦国期から織豊期、そして近世封建体制への変化が、如何に激しく、地域社会の再編成を押し進めたのかを理解することができる。このような中にあって、大宮・宮崎遺跡は、数少ない継続型の遺跡として位置づけることができる。治乱興亡の中にはあって終焉を迎える遺跡があり、新たに営みを開始する遺跡が存在することは当然の帰結であるが、大きな影響を被りながらも新旧の社会をつなぐ遺跡が見出しえるのは、軍事的要素の強い施設ではなく人々の生活の要求と強く結びついた遺跡であったところに起因するのではないだろうか。

- (註) (1) 小野正敏「14~16世紀の染付け碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
日本貿易陶磁研究会 1982年
森田 勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
日本貿易陶磁研究会 1982年
亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古稀記念古文化論考』鏡山猛先生古稀記念論文 集刊行会 1980年
(2) 松田直則「第一調査区(詰)」「中村城跡」中村市教育委員会 1985年
(3) 佐賀県教育庁大橋康二氏の御教示による。
(4) 藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界」財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム 1996年
(5) 大橋康二「近世における肥前陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集 国立歴史民俗博物館1994年
(6) 間壁忠彦『備前焼』ニューサイエンス社 1993年
(7) 山原恵三『上長谷遺跡発掘調査報告書』高知県三原村教育委員会 1991年
(8) 森田尚宏「扇城跡」財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
(9) 松田直則・竹村三菜「ハナノシロ城跡」「中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書I」財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993年
⑩ 出原恵三・宅間一之「芳原城跡発掘調査報告書」高知県教育委員会 1984年
⑪ 出原恵三「美良布遺跡」高知県香北町教育委員会 1991年
⑫ 吉成承二「姫野々城跡II」高知県葉山町教育委員会 1996年
⑬ 森田尚宏・松田直則・岡本桂典「岡豊城跡-第1~5次発掘調査報告書-」高知県教育委員会 1990年
森田尚宏「岡豊城跡発掘調査報告書II」財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

1992年

- 04 宅間一之・出原恵三『吉良城跡Ⅰ』高知県春野町教育委員会1985年
- 05 鈴木重治「生活遺跡出土の唐津陶」『島根県立博物館調査報告 第3冊』島根県立博物館
1982年
- 06 曾我貴行・宮地早苗『高知城跡』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- 07 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』高知県香我美町教育委員会
1988年
- 08 出原恵三・泉幸代・藤方正治・浜田恵子『小篠遺跡Ⅱ』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財
センター 1995年
- 09 松田知彦・松田直則・竹村三菜『土佐中村一条氏遺跡確認調査報告書』中村市教育委員会
1997年

南四国縄文時代の石器相

前田光雄

南四国における縄文時代剥片石器類の石器相は、縄文時代全般を通じて石器を主体として、在地産の石材を素材とし、搬入石材が一定の割合で混じる状況である。在地産の石材は大きく分けて頁岩、珪質頁岩、チャート、搬入石材はサヌカイト、姫島産黒曜石である。頁岩は西南四国の松田川流域、本遺跡の日黒川に多く見られる石材である。珪質頁岩は四万十川本流及び大月町周辺の遺跡で西南四国に分布を持つようである。チャートは全県下で認められ、南四国の中央部では剥片石器の主たる石材である。頁岩・珪質頁岩については遺跡近辺の河原で採集された転石を素材とするものである。

頁岩を主とする遺跡には西南四国松田川上流域の楠山遺跡・池ノ上遺跡（未発表）、及び愛媛県岩谷遺跡と本遺跡を上げることができる。時期的には旧石器時代の愛媛県和口遺跡でもナイフ形石器は頁岩製であり、またAT層直上と考えられる楠山遺跡でも多量の頁岩製の接合資料が出土しており、また縄文早期の段階まで頁岩を主体とする遺跡である。縄文後期では岩谷遺跡と本遺跡は共に配石遺構を検出しており、共に大形頁岩製剥片が多量に出土し、近似した内容を顯しているようである。頁岩を出土する遺跡の剥片は概して大振りの剥片が多く、また礫面を打面とするもの、礫皮を除去後連続的に剥片を剥離するものが多く、余り打面転位を頻繁に行わないものが多いようである。この特徴は旧石器時代から縄文時代を通じて全般的に認められる傾向である。頁岩製の製品は旧石器時代はナイフ形石器、縄文時代は剥片が多いものの、製品をほとんど見出せない状況である。楠山遺跡、本遺跡でも頁岩製石器はほとんど出土せず、本遺跡の石器の素材は1次調査ではサヌカイト製が多く、次いで姫島産黒曜石となっている。岩谷遺跡では大形頁岩製剥片を利用して削器が30点余り出土しているところから、頁岩は定形的な小形剥片石器の素材とはならなかったようである。

珪質頁岩については四万十川上流域の十川駄場崎遺跡、木屋ヶ内遺跡で早期の石器・剥片が多量に出土している。両遺跡とも河原から転石を探集している。大月町ナシケ森遺跡A地点では丘陵斜面地の露頭から珪質頁岩を探取した原産地遺跡である。時代は細石刃核、石器、楔形石器、剥片が出土しており、旧石器終末から縄文草創期と考えられている。ナシケ森遺跡のB地点では珪質頁岩製のナイフ形石器・角錐状石器が出土しており、大月町竜ヶ迫遺跡でもナイフ形石器が出土している。ナシケ森遺跡A地点では特に楔形石器が際立っており、原産地遺跡特有の製品がほとんど見られない状況である。木屋ヶ内遺跡でも楔形石器が50点以上も出土しており、また多くの珪質頁岩製石器が出土する。楔形石器に関しては愛媛県中津川洞遺跡でもチャート製が多く、西南四国では草創期から早期にかけて出土する傾向が最近の調査例から判明している。珪質頁岩を主石材とする地域では搬入品としては、姫島産黒曜石が次いでサヌカイトである。旧石器時代では黒曜石・サヌカイトは搬入されないようである。剥片剥離法は旧石器時代については不明瞭だが、瀬戸内技術は明確に認められていないようである。縄文時代については、珪質頁岩の岩質は節理が多く発達していることから、礫面をそのまま打面として剥片を剥離するもの、礫皮を除去後剥片を剥離するもの、節理で分割を行い節理を打面とするものを基本とし、節理の為に連続的に剥片を剥離することが困難で、打面転位を頻繁に行うものが多い。また剥片自体も定形的なものは少なく、長幅比にばらつきが認められる。定形石器は石器が多く、不定形石器の削器等も珪質頁岩に依存しているようである。但し、石匙はサヌカイト製が圧倒的に多く、器種による石材の選別が

行われている。

頁岩・珪質頁岩が採取できない地域では在地産のチャートに依存しているようである。特に県中央部では旧石器時代はチャートで占められているようである。奥谷南遺跡ではナイフ形石器、細石刃はすべてチャート製のものである。ナイフ形石器は瀬戸内の影響はほとんど認められていない。また細石刃核は船野型と野戸・休場型が1対2の割合で出土している。草創期でも石器はチャート製、槍先形尖頭器にはサヌカイトが搬入されるようである。鈎古屋岩陰遺跡では早期の押型文に伴い300点以上の石器が出土しており、サヌカイト約230点、チャート約90点、姫島産黒曜石2点が出土しており、県中央部では草創期の段階からサヌカイトが搬入され始め、早期の段階になり早くも本格的に搬入されるようである。後期には松ノ木遺跡は400点あまりの石器はほとんどがサヌカイト製になってしまふ。西南四国で

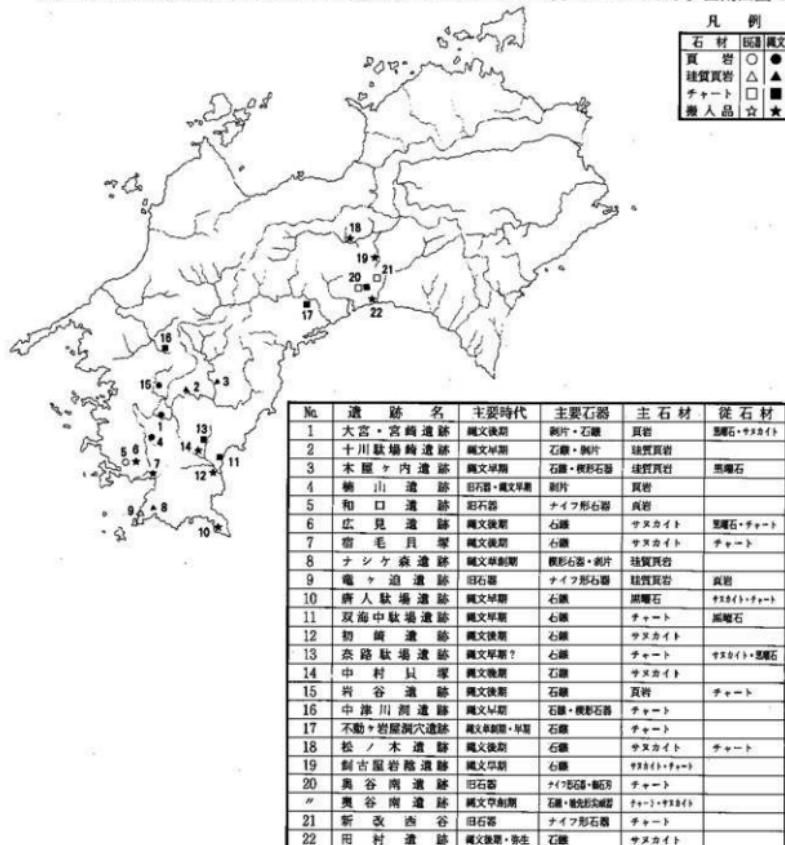


Fig. 19 南四国石材別遺跡分布図

は縄文早期の段階ではチャートを主体として補完的にサヌカイト・黒曜石が認められる程度である。県中央部とは状況は違っているようである。

これ以外のタイプとして、黒曜石が主体となる遺跡が若干認められている。土佐清水市の唐人駄場遺跡は縄文早期の段階で石器の大半が黒曜石でチャートが従なっている。

南四国の剥片石器の石材による様相を類型化してみると、A型—在地産石材を主とするもの、B型—在地石材に搬入石材が加わるもの、C型—搬入石材を主とし在地産が従のもの、D型—搬入石材でほとんど占められるもの、に分けることができる。時代別では旧石器時代はA型でほとんど占められており、この傾向は縄文時代草創期まで継続する。奥谷南遺跡の草創期のみB型になっているものの、槍先形尖頭器のみサヌカイト製が認められ、器種による石材が選別されており、極めてA型に近い内容である。縄文時代早期になるとB型に変化する。西南四国での搬入品は黒曜石が主体となるが、サヌカイトも若干混じるようである。搬入石材が主となるC型はサヌカイトの飼古屋岩陰、黒曜石の唐人駄場遺跡が際立っている。またA型に含まれるものも存在するが、この石器組成は楔形石器を主体とする遺跡で、草創期のナシケ森遺跡A地点も同様である。縄文前期・中期は今のところ不明であるが、後期になるとC型とD型となる。石器の大部分がサヌカイトとなり、西南四国の遠隔地でもサヌカイトへの指向が強くなる。A・B型に岩谷遺跡と大宮・宮崎遺跡が含まれているものの、配石遺構内から出土した剥片・削器を主としているところから事情は他の後期の遺跡とは異なる。後期は基本的にD型となるようである。

南四国の剥片石器の様相は単純化してしまえば、在地産石材主体から搬入石材が加わり、縄文後期からは搬入石材、殊にサヌカイトに取って替わられるといえる。

表6 遺跡類型表

パターン	貯石器時代	縄文時代 草創期	縄文時代 早期	縄文時代 後期	縄文時代 晩期
A 在地産石材 ①頁岩 ②珪質頁岩 ③チャート	和口・楠山・ 池ノ上 ナシケ森B・ 竜ヶ迫 奥谷南・新改 西谷	ナシケ森A 不動ヶ岩屋	十川駄場崎 中津川洞	岩谷	
B 在地産石材 + 搬入石材 ①頁岩・サヌカイト ②珪質頁岩・サヌカイト ③チャート・サヌカイト ④頁岩・黒曜石 ⑤珪質頁岩・黒曜石 ⑥チャート・黒曜石		奥谷南	奈路駄場 木原ヶ内 双海中駄場	宮崎大宮	
C 搬入石材 在地産石材 ①サヌカイト・頁岩 ②サヌカイト・珪質頁岩 ③サヌカイト・チャート ④黒曜石・頁岩 ⑤黒曜石・珪質頁岩 ⑥黒曜石・チャート			飼古屋岩陰 唐人駄場	広見・宿毛	
D 搬入石材 ①サヌカイト ②黒曜石				初崎・松木・ 田村	中村貝塚

参考文献

- 岡本健児・片岡鷹介 1967 「高知県不動産ガ岩屋洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社
- 西田 栄他 1978 『中津川洞 第Ⅲ次発掘調査概報』城川町教育委員会
- 犬飼徹夫 1978 「岩谷遺跡」愛媛県広見町
- 長井數秋・十亀幸雄他 1979 「穴神洞遺跡」『城川の遺跡』城川町教育委員会
- 長井數秋・十亀幸雄他 1979 「中津川洞遺跡」『城川の遺跡』城川町教育委員会
- 森田尚宏 1983 『銅古屋岩陰遺跡調査報告書』高知県教育委員会
- 木村剛朗 1987 『四万十川流域の縄文文化研究』
- 山口将仁 1990 「高知県における後期旧石器時代の様相」『旧石器考古学41』旧石器文化談話会
- 前田光雄 1991 「松ノ木遺跡第5次調査現地説明会資料」本山村教育委員会
- 森田尚宏 1994 「竜ヶ迫遺跡」『竜ヶ迫遺跡・ムクリ山遺跡』大月町教育委員会
- 木村剛朗 1995 「四国西南沿海部の先史文化」
- 前田光雄 1995 「木屋ヶ内遺跡」大正町教育委員会
- 松村信博 1996 「高知県奥谷南遺跡」『考古学研究第43巻第3号』
- 前田光雄 1996 「十川駄場崎遺跡第5次発掘調査」十和村教育委員会
- 門脇 隆 1996 「ナシケ森遺跡現地説明会資料」大月町教育委員会
- 松村信博 1997 「南四国の縄文時代草創期－奥谷南遺跡を中心として－」『中・四国の縄文時代草創期の土器と石器組成』第8回中四国縄文研究会レジュメ

表7 縄紋土器観察表

図版番号	器種	色 調	胎 土	備 考
Fig.12-1	深鉢	にぶい黄橙色	角閃石を多く含む	口縁部厚く、上面に太く前面に軽い沈線をめぐらす。
Fig.12-12	深鉢	にぶい橙色	石英、雲母、風化礫を含む	口縁部に2状の沈線を押し引き風に施し、沈線間に刺突紋を施す。
Fig.12-13	深鉢	赤褐色	石英、雲母粒を多く含む	口縁部に2条の沈線を押し引き風に施す。
Fig.12-14	深鉢	褐色	石英、長石の細粒を含む	口縁部に2条の区画沈線、沈線間に連続しない沈線を描き端部にC字形を描く。
Fig.12-15	深鉢	褐色	石英、長石、雲母の細・粗粒砂を含む	2条の沈線跡、その上に鉤状の沈線。
Fig.12-16	深鉢	褐色	石英、角閃石を多く含む	上部に3条を準位とする直沈線を2番目とその間に波状沈線を1条送らす。直沈線間に斜沈線を送る。内外ナマ開窓。
Fig.12-17	深鉢	褐色	石英、長石、雲母の細・粗粒砂を含む	肥厚した口縁部にRの短沈線を施す。
Fig.12-18	深鉢	褐色	長石他細粒を含む	肩部外面にR Lの縄文を施す。
Fig.12-19	深鉢	褐色	石英、長石粗粒砂を多く含む	外外面横ナマ調整。

表8 中・中世土器観察表

挿図番号	出土地点	器 種	法量 口径 (cm)器高 底径(高台径)	特 微	備 考
Fig.11-2	SK2	白磁碗		白色やや粗い胎土 断面台形状のしっかりした高台。豊付けまで施す、一部高台内までかかる。	
Fig.11-3	SB1-P1	青磁碗	(5.4)	灰褐色やや粗い胎土 透明度のある緑色の釉、貫入。見込み露胎底部外面にコテによる毛刷りの単位を認める	

挿図番号	出土地点	器種	法量 口径 (cm)器高 底径(高台径)	特 徴	備 考
Fig.11-4	SK1	青磁碗	(5.0)	灰色堅致な胎土。 透明度のある灰青色の釉、貫入あり。 見込みに印花紋、外底のみ釉カキ。	
Fig.11-5	SK3	染付け碗	13.4	明、陶胎染付け。黄白色のやや粗い胎土。 蛤色の戸明釉、貫入あり。口縁部外面波涛紋、体部外面芭蕉紋。	
Fig.11-6	SB1-P3	陶器碗	11.0	肥前座灰釉陶器碗。淡茶色の粗い胎土。高台脇まで施釉。体は水平に近く削られた高台脇から屈曲して立ち上がる。	
Fig.11-7	SB1-P10	染付け皿	10.0 2.8 (5.0)	明、磁器。白色でやや粗い胎土。透明釉。 見込みに花紋を灰配し、蛇の目状に釉剥ぎ。 邊付け付近の露胎部は橙色に発色。	
Fig.11-8	SB1-P1	陶器碗	10.0 5.2 (5.0)	肥前座灰釉陶器碗。灰色のやや粗い胎土。 低い削り出し高台。体部下半で種かに稜をなして立ち上がる。外面露胎部茶色。	
Fig.11-9	SK2	備前窯	38.3	赤茶色に発色。 玉縁状口縁部を有す。	
Fig.12-20	集石中	青磁碗	(5.4)	灰色堅致な胎土。見込み印花紋。 外底露胎部褐色に発色。	
Fig.12-21	包含層	青磁碗	(6.8)	灰色堅致な胎土。見込み印花紋。 薄緑色の釉が厚くかかり、高台内面に及ぶ	
Fig.12-22	包含層	青磁碗	11.0	灰色堅致な胎土。 外縁細連弁	
Fig.12-23	包含層	青磁碗		灰色やや粗い胎土。 口縁部外面雷紋帯。	
Fig.12-24	包含層	青磁碗	(6.0)	灰色堅致な胎土。 透明度のある灰緑色、高台内にも釉がまわる。	
Fig.12-25	包含層	青磁碗	13.0	灰白色やや粗い胎土。透明度のある薄青色の釉。口縁部外面雷紋帯くずれ、体部剣先連弁くずれ。	
Fig.12-26	包含層	白磁小皿	(4.2)	灰色堅致な胎土。 見込み及び疊付けに砂目。	
Fig.12-27	包含層	白磁小皿	11.1	白色のやや粗い胎土。 口縁部端反。	
Fig.12-28	包含層	白磁小皿	11.8	黄白色の粗い胎土、赤色微砂を疎らに含む失透性の釉。見込み蛇の目の釉剥ぎ。	
Fig.12-29	包含層	白磁小皿	(7.2)	白色のやや粗い胎土。 わずかに白濁した透明釉。高台に砂付着。	
Fig.12-30	集石中	白磁小皿	11.4 2.9 (6.1)	白色堅致な胎土。白濁の釉。	
Fig.12-31	包含層	白磁小皿	12.5 2.5 (6.5)	白色堅致な胎土。白濁の釉。	
Fig.12-32	包含層	染付け皿		白色堅致な胎土。 外面牡丹唐草紋。	

挿図番号	出土地点	器種	法量 口径 (cm) 器高 底径(高台径)	特徴	備考
Fig.12-33	包含層	染付け碗		黄白色でやや粗い胎土。 口縁部内面1条の界線、外面波涛紋、体部 外面芭蕉紋。	
Fig.12-34	包含層	染付け碗		黄白色でやや粗い胎土。 口縁部外面波涛紋、体部外面芭蕉紋。	
Fig.12-35	包含層	染付け碗		白色やや粗い胎土。 外面結合紋	
Fig.12-36	包含層	染付け皿	(3.2)	白色やや粗い胎土。 基筒底 見込みに捻花、外面芭蕉紋。	
Fig.12-37	包含層	染付け皿	(3.5)	白色やや粗い胎土。 基筒底 見込みに捻花、外面芭蕉紋。	
Fig.12-38	包含層	染付け皿	(4.2)	白色堅致な胎土。 見込みに十字花紋、外面唐草紋。	
Fig.12-39	包含層	染付け碗	11.4	陶胎染付け、白色のやや粗い胎土。 口縁部内面1条の界線、外面2条の界線、 体部外面結合紋。	
Fig.12-40	包含層	染付け皿	15.8 3.5 (9.0)	白色堅致な胎土。 外面唐草紋、高台内側に砂付着。	
Fig.13-41	包含層	天目茶碗	(3.8)	灰色堅致な胎土。鉄釉施釉。 高台脇を水平に削り出す。	二次的に 被熱
Fig.13-42	包含層	天目茶碗	11.4	灰色のやや粗い胎土。 鉄釉	
Fig.13-43	包含層	天目茶碗	12.5	瀬戸天目。黄白色のやや粗い胎土。 鉄釉	二次的に 被熱
Fig.13-44	包含層	陶器皿	11.3	肥前系灰釉皿。灰褐色の粗い胎土。 内面前面と外面中位まで施釉。	
Fig.13-45	包含層	陶器皿	13.1	肥前系灰釉皿。灰褐色の粗い胎土。	二次的に 被熱
Fig.13-46	包含層	陶器皿	(4.2)	肥前系灰釉小皿。褐色でやや粗い胎土。 体部中位で屈曲、外面屈曲部以下露胎。 鉄絵。胎十目摘。	
Fig.13-47	包含層	陶器皿	(5.0)	肥前系灰釉小皿。褐色でやや粗い胎土。 内面前面と外面下半まで施釉。 砂目積。	
Fig.13-48	集石中	陶器皿	(5.0)	肥前系灰釉小皿。褐色でやや粗い胎土。 外面高台脇付近まで施釉。 砂目積。	
Fig.13-49	集石中	陶器皿	(7.6)	肥前系灰釉小皿。褐色でやや粗い胎土。 内面露胎。割り高台。	
Fig.13-50	包含層	陶器皿	(5.2)	肥前系刷毛目皿。赤褐色のやや粗い胎土。 透明釉は焼成不良により白濁。 見込みに白化粘土による象嵌。	
Fig.13-51	包含層	染付け碗		肥前系碗。白色堅致な胎土。 草花紋。	

挿図番号	出土地点	器種	法量 口径 (cm)基高 底径(高台径)	特徴	備考
Fig.13-52	包含層	染付け皿	14.8	灰白色のやや粗い胎土。 口縁部外面波溝紋。	
Fig.13-53	包含層	染付け碗	17.0	有田産。白色堅致。 内面四方櫛紋、外面花唐草紋	
Fig.13-54	包含層	染付け小瓶	(3.2)	白色のやや粗い胎土。 草花紋。高台内面「大明成化年製」銘あり	
Fig.14-55	集石中	陶器碗	(4.7)	京焼風陶器碗。入白色緻密な胎土。 登付け粘着き	
Fig.14-56	包含層	陶器碗	11.1	産地不明 灰白色のやや粗い胎土。灰釉。	
Fig.14-57	包含層	土師器皿	6.0	精選された胎土。	外面煤け
Fig.14-58	包含層	陶器碗	11.4	肥前産灰釉碗。淡茶色でやや粗い胎土。 貫入。	
Fig.14-59	包含層	陶器碗	11.0	肥前産灰釉陶器碗 灰褐色の粗い胎土。 体部下半で屈曲して立ち上がる。	
Fig.14-60	包含層	陶器碗	18.8	肥前産灰釉陶器碗 灰白色は粗い胎土。	
Fig.14-61	包含層	備前擂鉢		胎土中に砂粒をほとんど含まない。	
Fig.14-62	包含層	備前擂鉢		長石の細粒を多く含む。	
Fig.14-63	包含層	備前擂鉢		長石・他の細粗粒砂を含む。	
Fig.14-64	包含層	備前擂鉢		長石・他の細粗粒砂を含む。 内面シモフリ顯著。	
Fig.14-65	包含層	備前擂鉢		長石の細粒砂を含む。	
Fig.14-66	包含層	備前片口壺		長石粒を少し含む。 上胴部に沈線1条あり。	
Fig.14-67	包含層	備前擂鉢		長石・石英の細粗粒砂を多く含む。	

表9 石器観察表

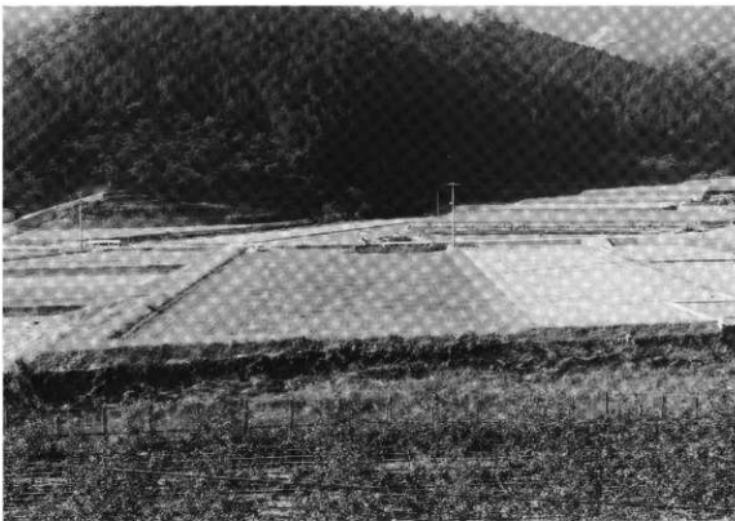
単位はmmで、内数値は既存状

遺物號	器種	出土地点	出土層位	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)	石質	分類	破損状態
1	石鏃	II 3	II	(1.6)	(1.14)	0.11	(0.2)	サヌカイト	1	片脚
2	石鏃	III	表土	(1.54)	1.38	0.24	(0.4)	黒曜石	2	片脚
3	石鏃	II 3	II	(1.46)	(1.24)	1.26	(0.4)	黒曜石	2	片脚
4	石鏃	II 2	II	1.82	1.63	0.39	0.7	黒曜石	2	完形
5	石鏃	II 3	II	(2)	(1.52)	0.25	(0.7)	チャート	2	先端・片脚
6	石鏃	II 3		(1.39)	(1.18)	0.32	(0.5)	チャート	3	先端・両脚
7	石鏃	II 3	II	(1.48)	1.53	0.17	(0.6)	珪質頁岩	3	先端
8	石鏃	II 3	II	(1.92)	(1.52)	0.25	(0.9)	サヌカイト	3	先端・両脚
9	石鏃	III	表土	(1.11)	(1.1)	0.23	(0.4)	頁岩	4	両脚
10	石鏃	III	表土	2.04	1.46	0.16	0.7	珪質頁岩	4	完形
11	削器	II 2	II	4.41	10.55	1.51	75.7	頁岩		新しい破損あり
12	石斧	II 1	II	11.06	4.36	1.9	117.4	頁岩		
13	石鏃	III	表土	3.88	3.44	1.41	23.9	砂岩		
14	石鎚	II-SK1		6.54	4.57	0.92	43.5	頁岩		
15	磨石	II 2	II	8.02	7.6	4.82	438.1	花崗岩		
16	石核	II 2	II	6.72	5.77	2.84	120.6	頁岩		
17	石核	II 3	III	10.92	15.4	3.94	715.4	頁岩		
18	剥片	II 3		5.08	9.78	1.13	86.7	頁岩	1	
19	剥片	II 3		8.13	5.14	1.62	79.5	珪質頁岩	2	
20	剥片	II 1		6.03	6.05	1.84	68.4	頁岩	2	
21	剥片	II 3		7.87	3.96	1.25	46.6	頁岩	2	
22	剥片	II 2	II	4.05	5.8	1.15	26.9	頁岩	3	
23	剥片	II 3		6.66	6.56	2.07	86.9	頁岩	3	
24	剥片	S D 西		4.37	3.55	0.93	14.7	頁岩	4	
25	剥片	II 3		7.78	8.75	2.2	132.2	頁岩	4	
26	剥片	II 1	III	8.17	9.21	1.5	150.6	頁岩	4	
27	剥片	II 1		9.38	7.11	2.58	216.2	頁岩	4	
28	剥片	II 3	III	8.85	8.39	1.94	180.4	頁岩	4	
29	剥片	II	表探	11.44	5.33	2.7	241.4	頁岩	5	
30	剥片	II 1		6.84	6.17	1.33	63.6	頁岩	6	
31	剥片	II 1	II	8.34	10.72	2.42	233	頁岩	7	

写 真 図 版

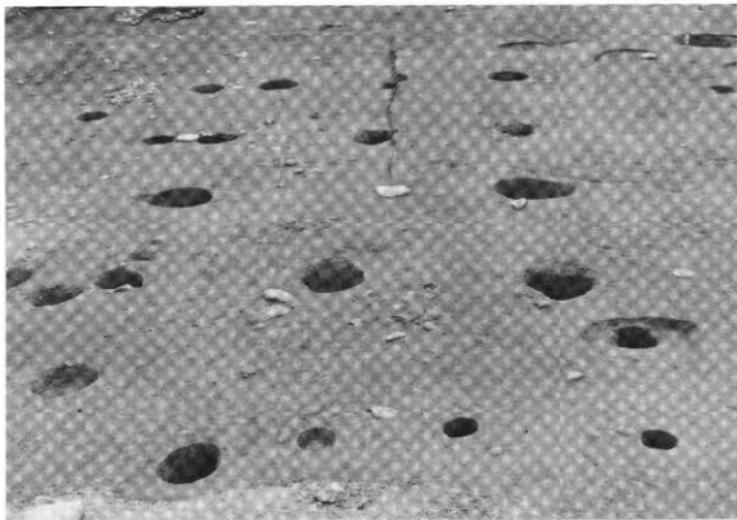


II 区 遠 景 (北東から)



III 区 遠 景 (東から)

P L 2



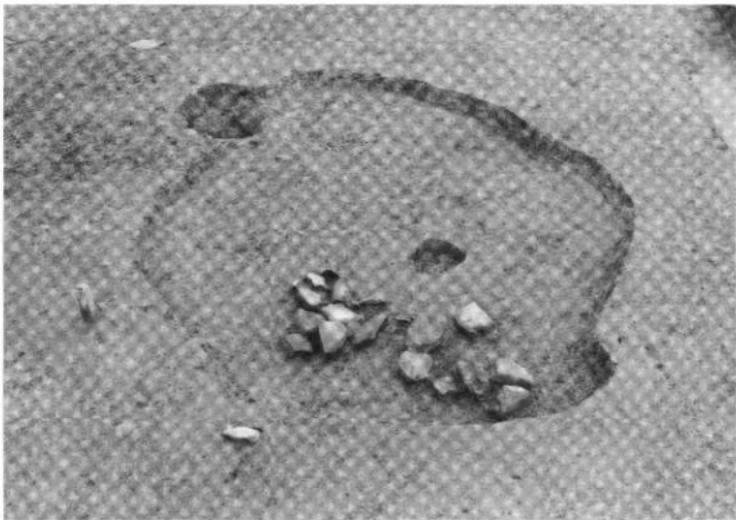
S B 1 完堀 (北西から)



同 上 (南東から)

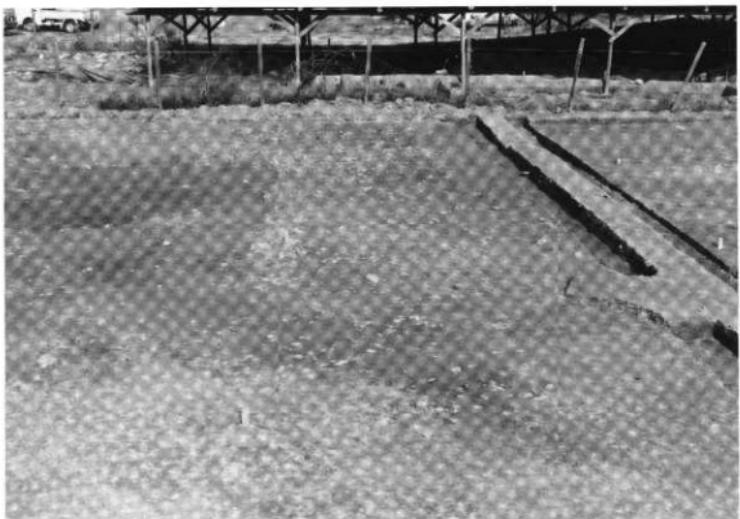


SK 3 検出状況

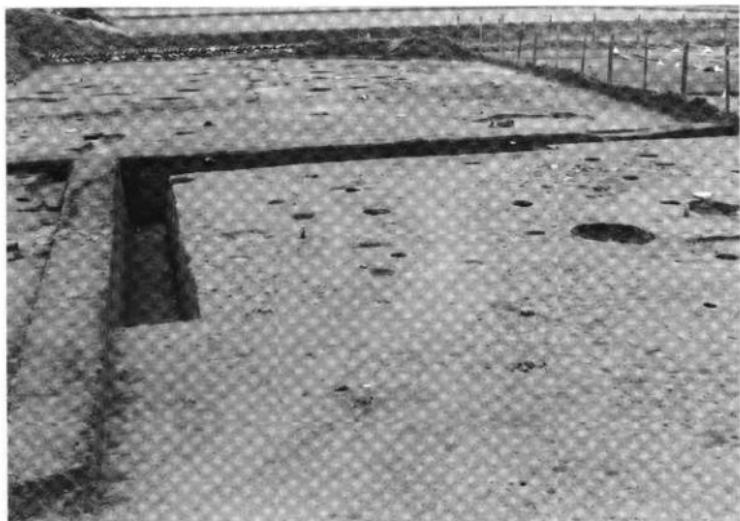


SK 3 完 塚

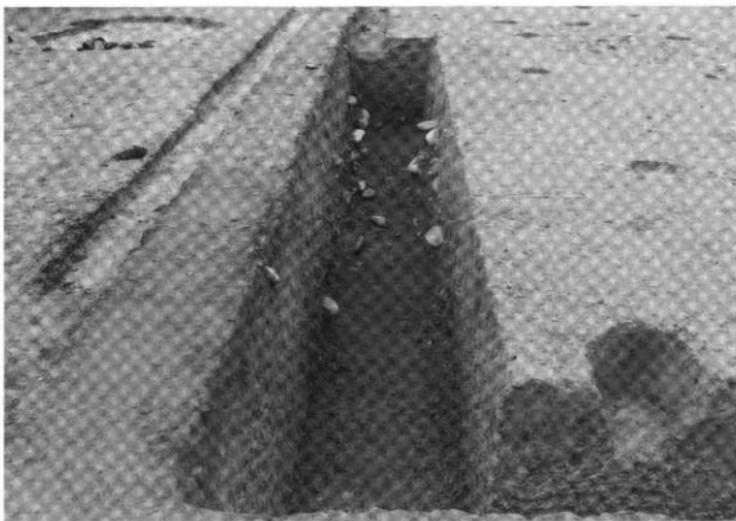
P L 4



整地層(東から)



セクション(A-B)



セクション (A-B)



II区完堤全景 (南から)

P L 6



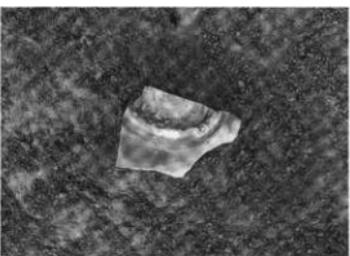
II区完堀全景（北西から）



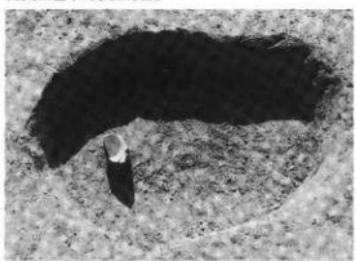
作業風景



绳文土器(16)出土状況



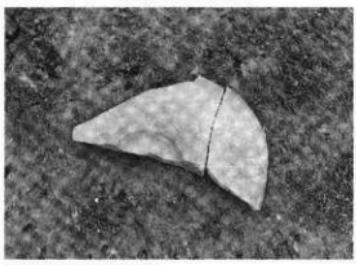
青磁碗(21)出土状況



S B 1 - P 3 肥前產(6)出土状況



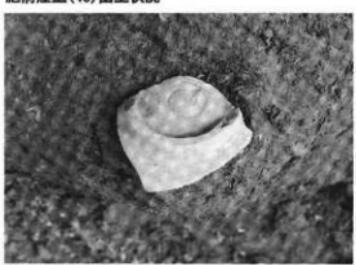
同 左



肥前產皿(46)出土状況



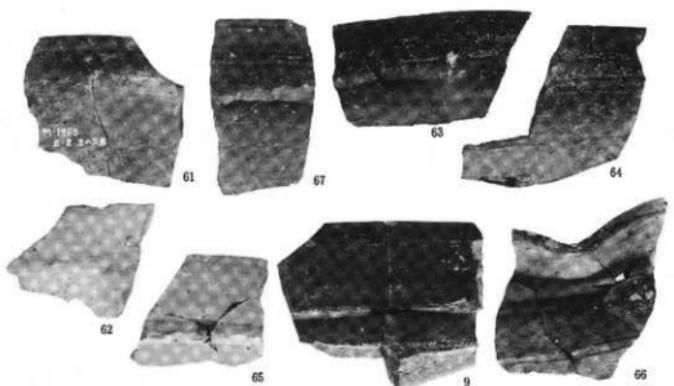
肥前產皿(47)出土状況



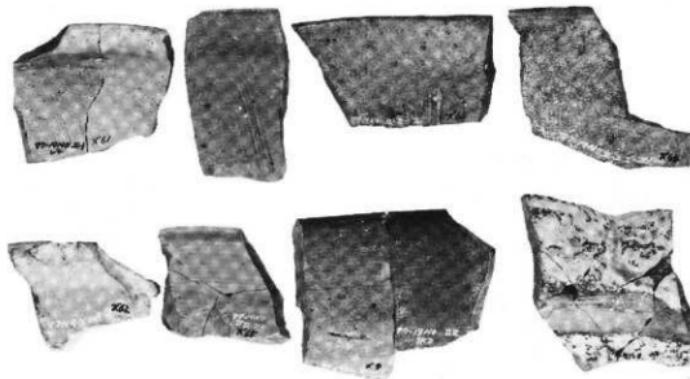
青磁碗(24)出土状況



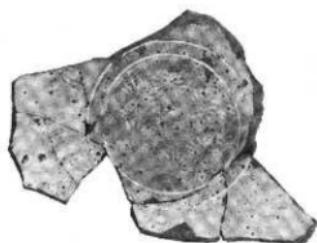
S K 1



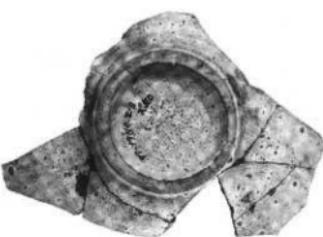
備 前 烧



同 上 内 面



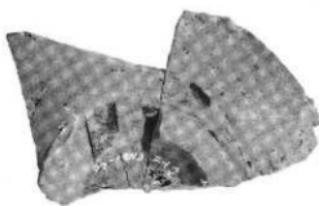
50



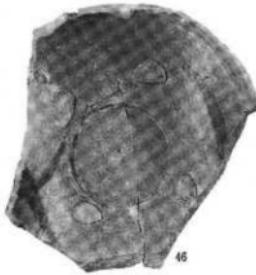
同(外面)



49



同(外面)



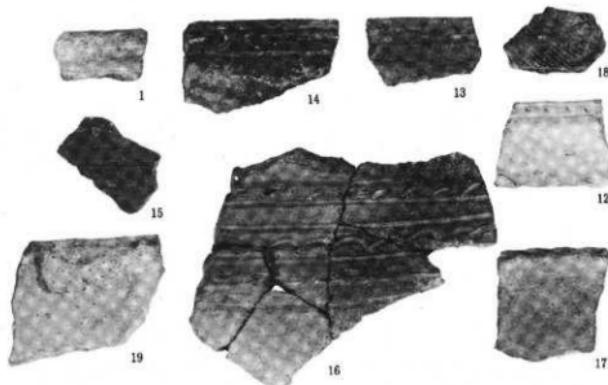
46



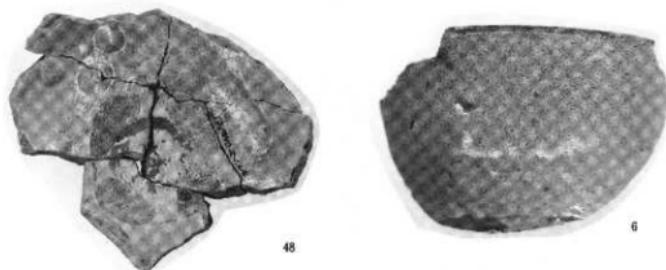
同(外面)

肥前産皿

P L 10



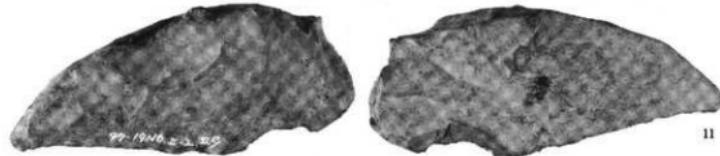
綱文土器



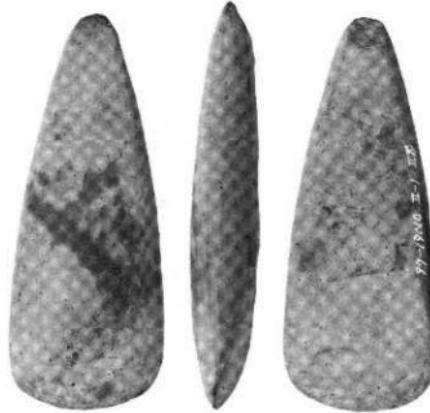
肥前產陶器



石 鐵



削 器



磨 製 石 斧

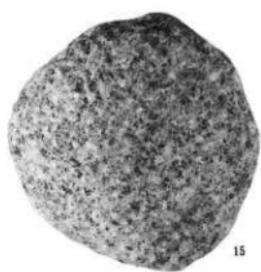
P L 12



13



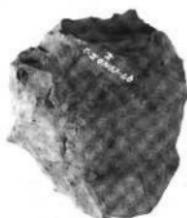
14



15

石 锤

磨 石



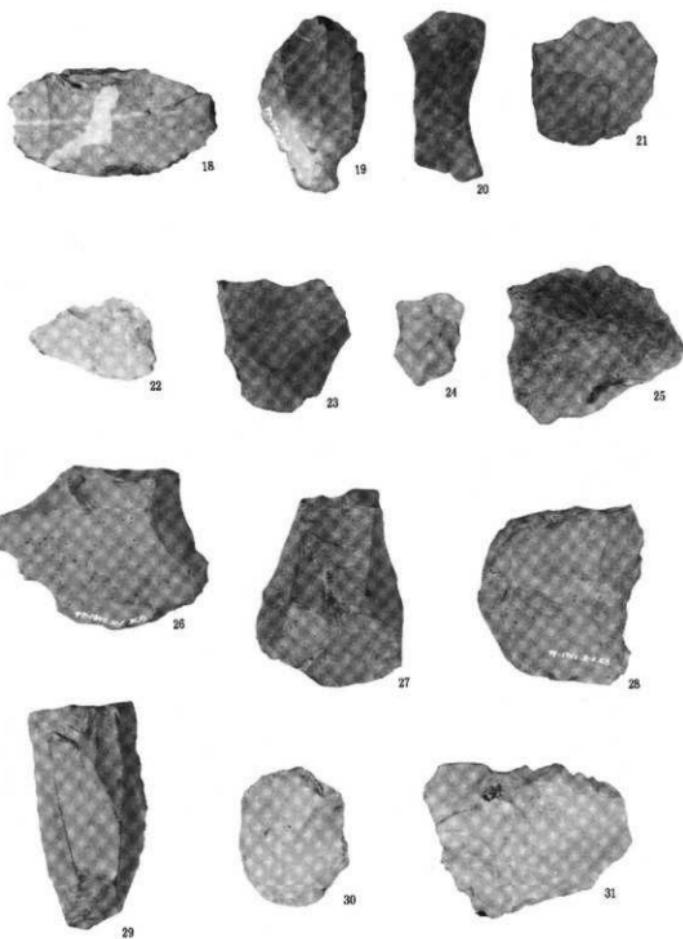
16



19-19N0.5+3.37

17

石 核



剥 片

報告書抄録

ふりがな 書名	おおみや・みやさきいせき 大宮・宮崎遺跡							
副書名								
卷次	II							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	出原恵二							
編集機関	高知県西土佐村教育委員会							
所在地	高知県幡多郡西土佐村江川崎							
発行年月日	西暦1998年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大宮・宮崎遺跡	高知県 幡多郡 西土佐村 大宮	市町村	遺跡番号	426	520014 33度 8分	132度 43分 西土佐村 教 育 委 員 会	900m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大宮・宮崎遺跡	集落	中・近世	掘立柱建物	陶磁器				

高知県西土佐村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

大宮・宮崎遺跡

1998年3月

発行 高知県西土佐村教育委員会
高知県幡多郡西土佐村江川崎
TEL 0880-52-1111

印刷 備 産 川 印 刷